

---

# インフィニット・ストラatos **黒き叡智**

竜華零

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

インフィニット・ストラトス 黒き叡智

### 【Zコード】

Z0293Z

### 【作者名】

竜華零

### 【あらすじ】

IS、それは宇宙開発を目的に開発されたマルチフォーム・スー  
ツ。現行兵器を遥かに凌駕する性能を持つそれは、瞬く間に世界を  
変革させた。

そしてそんな世界に生きる少女、名は「篠ノ乃 楓」。

IS開発者、篠ノ乃 楓の実妹にして、IS操縦者養成所「IS学  
園」の女生徒、篠ノ乃 篓の双子の妹。好きなものは姉、将来の夢  
は宇宙進出、そんな女の子。篠ノ乃姉妹の末っ子、ただいま15歳。  
長姉、妹によつて黒き叡智を受けられた彼女は、はたしてこの世界

で何を見るのか  
?

この物語は、「インフィニット・ストラトス」を原作とするオリジナル主人公再構成モノです。苦手な方はご注意ください。原作準拠・非アンチが基本原則、でも原作の範囲を超えたラオジナル展開になる可能性があります、ご注意ください。

\*パロディ要素あり、そう言った表現が苦手な方はご注意ください。

プロローグ…「お姫ひめこのお願い」（前書き）

はい、それでは……。

妹「はーじまーのよー」

・・・・?

プロローグ：「お姉ちゃんのお願い」

プロローグ：「お姉ちゃんのお願い」

インフィニット・ストラトス、通称『IS』。

人間が宇宙に進出し、活動することを目的に開発されたマルチフォーム・スース。

核である「コア」とそれを守る装甲から成る、人類を次のステージへと押し上げることを可能とする鍵。

開発者の名は、篠ノ之 束。

しかし従来の機械を遥かに凌駕する性能を知った主要国は、これを宇宙開発では無く「兵器」として利用することを考える。

結果、『IS』は現行兵器を超える「機動兵器」として世界に認知される」とになった。

しかしこの新たな「兵器」には、致命的な欠陥が2つ、存在した。一つは『IS』の起動に不可欠な「コア」の存在、これは世界に467個しか存在しない。

開発できる唯一の人間である篠ノ之 束がそれ以上の数を製作しないためで、これにより『IS』の絶対数は467機と制限されたことになった。

そしてもう一つ、むしろこちらの方が致命的かつ決定的な欠陥・・・。

『HIS』は、女性にしか使用できない。

原因は不明、開発者である篠ノ之 束ですらわからなことされている。

しかし、いざれにせよ『HIS』の絶対性と欠陥は、世界を変革した。誰が望んだ変革かは別として・・・そつ。

世界は、変わったのだから。

・・・「誰か」のために、「誰か」によつて。

Side 篠ノ之 楓

某国・某地域・某秘密ラボ・某部屋

正確な位置を教えられなくてごめんなさい、でも一応、私は潜伏中なので。

誰にともなく謝りながら、私は空中投影のディスプレイ3枚と睨めつこ中。

2枚の空中投影型のキーボードに指を踊らせつつ、1-2畳四方くら

にある部屋の中央にある「モノ」に、時折視線を投げる。そこまで、ちよつと普通では無い部屋。

「……お？」

灰色の無機質な部屋には無数の大きな機材とケーブルの束があつて、そこら中に小さなネジやボルトが散らばってる。

そして今、私と目が合つたのは・・・機械仕掛けのリスト。

ドングリのようにネジを齧る姿は、何だか可愛い。

束お姉ちゃんが作ったリストだけ、用途は良く知らない。でも束お姉ちゃんが作った物の中では比較的マトモな部類で、結構好き。  
だって、可愛いし。

「何より、無害だし・・・無害なのは良いよね」

ここは、束お姉ちゃんの秘密ラボ。

場所は定期的に移動するから、何とも言えないけど・・・設備はたぶん、世界一。

かれこれ数年間、ここで束お姉ちゃんと「ユーチャン」さんと過ごしてゐる。

「……えーでーちやーんっ」

「・・・お？」

「かーえーでーちゃんつーーー！」

声が、した。

次いで、ドタドタドタ・・・と言つ誰かが駆けて来る音。それに反応して、すぐに私は身構える。

過去の経験から、「あの人」は部屋のドアから突撃してくる」とはわかってる。

彼我の距離7メートルを物ともせず、またに「飛びついて」来るのだ。

危ないからやめてつて言つてゐるのに、全くもつて聞いてくれない。だから、私の方がちゃんと対応してあげないと

「だあーいーユースだよつ、楓ちゃんつーーー！」

しかし、相手の方が上手だつた。

何故なら相手は、ドアの方ばかりに氣を取られていた私の虚をついて、上から來たから。

がぱつ、と天井の一部を外して、上から飛び下りると言つ形で。

むわわわわ。

・・・人が潰される音をじくじくミミカルに変換してみても、痛みは

変わらないと言つことがわかつた。

何と言うか、押し潰された。

首と腰とか足とか、諸々の骨が軋んで  
つたんだろう

潰された。

むしろ、何で折れ無か  
成人女性が身体の上に落ちてくれば、それなりの音と衝撃が駆け抜  
けるわけで……。

「……お、お姉ちゃん……お姉ちゃんが全力で飛びつくと私の  
命が危ないと何度も願いしたら……」

「あつははは～、楓ちゃんは今日もラブリーだね～、お姉ちゃんは  
嬉しいよ～」

息も絶え絶えな私の言葉を軽くスルーするこの人は、私のお姉ちゃん。

天井から落ちて来たのは、20代の女性。  
腰まで伸び放題になつた髪に、どことなく「不思議の国のアリス」  
を思わせる青色のワンピース。

頭には何かの機械らしいウサミミカチューシャ、眠そうな目を二  
杯笑みの形に歪めて、私を抱き潰そうとしている。

名前は、篠ノ之 束。たばね

私の実の姉で、『T.S』を開発した本物の「天才」。

「天才」の名に恥じず……と言つた「天才」という言葉がバカら  
しくなるくらいの「天才」なのだけど、何だろう、身内に対する距  
離感がゼロ距離な人……。

「ねえねえねえ、楓ちゃん楓ちゃん、大ニユースだよ大ニユース、もう大ニユース過ぎてお姉ちゃんは楓ちゃんに抱きつかざるを得なかつたよー」

「・・・それは良いから、離してお姉ちゃん・・・」「実はねえ、いつくんがね あ、いつくんは知ってるよね？ 知ってるに決まってるよね、楓ちゃんだもんね うん、いつくんがねえ、どどーんつ、何と『IIS』を動かしちゃいました、ぱふぱふ～」

そして、人の話を聞いてくれない。

でも、まるで緊張感も何も無いような人だけど、絶賛世捨て人中。先程も言つたように、私・・・と言うか束お姉ちゃんは世間的に言うと、失踪中だから。

どうして世間から身を隠そうとしたのかとか、それは良く知らない。でも数年前のある日、何を思い立つたのか失踪した。

でも『IIS』開発者である束お姉ちゃんの失踪は、他の人にとっては無視できない大事件。

何しろ、『IIS』のコアを作れる唯一の人物の居場所を把握できなわけだから。

まあ、束お姉ちゃんがどう感じているかは、わからないけど。そしてどう言つわけか、束お姉ちゃんはあの日、私も一緒に連れ出した。

・・・何で私まで連れ出したのか、束お姉ちゃんはさっぱり教えてくれないけど。

「いつくん・・・・ああ、一夏さんですか、笄姉さんの幼馴染

の「

「まつわき 篠姉さんは、日本にいる私の双子の姉。  
「おつむりこかが 織斑一夏さんは、その篠姉さんの小さい頃のお友達。

私も、何度か会った覚えがある。

私は小さい頃は身体が弱くて、ずっと家にいたから・・・。  
・・・だから同年代で会った子は少なくて、良く覚えてる。  
・・・あれ、でも一夏さんって。

「・・・男の子、だよね?」

「うんうん、不思議だよね、『IS』は女の子専用なのこねえ~」  
「それは・・・うん、本当にびっくりだね・・・」

束お姉ちゃんの作った『IS』は、男性には使えない。

と言つた、唯一にして最大と言つても良い欠陥で・・・なのに、男性の一夏さんが動かした。

束お姉ちゃんでさえ、驚いている・・・みたい。

いつも『IS』をしてるから、何を考えているかはわからないけど。

「本当にお姉ちゃんが行きたいんだけど、でもでも、お姉ちゃんにはやることが一杯なのでした~!」

「はあ・・・」

「と言つわけで、そこで登場お姉ちゃんのハンジェル、楓ちゃんに見て来て貰おうと思いまーす~」

「はあ？」

ダメだ、脈絡が無さ過ぎてダメだ。  
でもお姉ちゃんの笑顔は、花のエフェクトを飛ばしながら全力全開  
状態。

「うつなると、私は嫌と言えないわけで……。

「うつくくんはねえ、何だかどうでも良い連中が勝手にちーちゃんと  
篠ちゃんのいる所に放りこんじやつたみたいなんだよねえ～」  
「ちーちゃん・・・千冬姉様と、篠姉さん？」

千冬姉様は、束お姉ちゃんの親友、ついでに言えば一夏さんのお姉  
さん。

その人と篠姉さんがいる所・・・って、まさか、「あそ」！？

「む、無理無理無理っ！ 束お姉ちゃんと一緒に失踪してた私が突  
然現れて良い場所じゃ無いでしょ！？」

「んん～・・・のーふろぶれむつ！」

「そんなバカな！？」

親指を上に拳を握り込んでウインク、そんな束お姉ちゃんに私は悲  
鳴を上げる。

『E.S』の「アを作れる束お姉ちゃん・・・にくつついて失踪して  
た私が、突然ひょっこり「あそ」に出現したらどうなるか・・・  
考えただけで恐ろしい、と言つかりアルに怖い！

突然黒服に囮まれて拉致とかされたら、何とするつー？

「あつはははは～、楓ちゃんは心配性だねえ」「いやいやいや、そう言つ問題じや・・・」「だーいじょーぶつ、これまでお姉ちゃんが大丈夫って言つて大丈夫じゃ無かつたことがあるかなあ～？」

ある。

例えば、今。

「むう～、楓ちゃんお願ひつ、お姉ちゃんのお願いを聞いてほしいなあ～」

顔の前で手を重ねて「お願い」ポーズ、うう・・・そ、そんな風にされると。

ああつ、そんなウルウルした眼差しで見つめられたらあ・・・！  
う、うう・・・。

「しょ、しょうが無いな、今回だけだよ・・・？」

「ほんと？」  
「う、<sup>口グ</sup>了解・・・」

結局、私が折れて・・・むぎゅ～っと、束お姉ちゃんに強く抱き締められる。

豊満な胸に顔を埋められて凄く苦しいけど、でも私は引退がさない。

むしろ「やれり、お姉ちゃんの背中に手を回してみたつして。

はあ、私ってどうして東お姉ちゃんに甘いのかなあ・・・。  
・・・でも、お姉ちゃんってポカポカだよね。

「あ、ちなみに筆記試験って言つのが明日あるんだって。会場はイ  
スタンブール  
「な、何でイスタンブール・・・？」  
「あみだくじー」  
「え、ええええ・・・？」

はあ・・・東お姉ちゃんから離れて、私は傍の『HIS』の黒い装甲  
に触れた。

何か、物凄く不安だけど・・・でも、お姉ちゃんが大丈夫って言つ  
てるし。

それに、篠姉さんにも久しぶりに会えるし・・・。  
何より・・・「学校」に、行けるんだ。

・・・それじゃ、行こうか、『黒叢』  
いつか、お姉ちゃん達と宇宙を飛ぶために。

## プロローグ・「お姉ちゃんのお願い」（後書き）

篠ノ之 楓：

はい、ではここでは「IIS」についての説明をしますねー。  
お姉ちゃんの方がよく知ってるんですけど、説明とかしない人な  
で。

えーと……。

アイエス  
IIS：

正式名称「インフィニット・ストラトス」。宇宙空間での活動を想  
定し、開発されたマルチフォーム・スーツ。まあ、ちょっと大きな  
機械仕掛けの鎧みたいな物だと思って頂ければ……黄金聖 みた  
いな物です。

開発当初は認められませんでしたが、ある事件以降、世界にその性  
能が認められます。はい、でも宇宙開発には使用されずに軍事転用  
されました。現在では核兵器に替わる「抑止兵器」とも呼ばれてい  
ますね、数は500もありませんけど。

国際条約で、各国のIIS保有台数は厳格に定められています。

アーマー

IISは「アーマーと腕や脚など装甲から形成されています。シールドエ  
ネルギーによるバリアーや「絶対防御」などによって現行兵器（核  
兵器含む）ではIISに乗ったパイロットを倒すことはできません、  
チートです、流石は東お姉ちゃんです。なお、物質の量子化と言つ  
トンデモ機能もついています。

最大の特徴は「自己進化」。経験を積むとIISのアーマーは学習して成  
長します。成長するとより性能が上がりります、まるで人間みたいで  
すよね。

篠ノ之 楓：

・・・はい、この世界で一般に知られているE-Sの情報を説明しました。

もちろん、これで全てではありませんので、後は本編での説明をお待ちください・・・と。

ふう・・・疲れた。

飴食べよ・・・って、あれ、ドロップ缶が空っぽ？

篠ノ之 束：

あつはつはつ、中身はお姉ちゃんがぜんぶ頂いたよ！

楓ちゃんの説明が長かつたからね！

篠ノ之 楓：

え、えええええ・・・。

## 主人公設定（物語スタート時点）（前書き）

お久しぶり、あるいは初めてまして。  
この度「IS」に参入致しました、竜華零です。  
最近読み始めた作品ですが、頑張って完結まで持つて行きたいと思  
います。

まずは本編を投稿する前に、主人公設定を公開。  
今後、増えて行く可能がありますのでご注意ください。  
では、どうぞ。

## 主人公設定（物語スタート時点）

### 主人公設定（物語スタート時点）

氏名：篠ノ之 楓（しののの かえで）

誕生日：7月7日 年齢：15歳

身長：156cm 体重：43kg

スリーサイズ：B74/W56/H80

髪の色：黒 瞳の色：黒

特技：

束お姉ちゃんの暇潰しに付き合つこと。

パソコン関係（ハッキング、プログラミング、タイピング等）。

IS関係（整備・設計・解析・改良等・・・勿論、実姉の束の足下にも及ばないが）。

好きなもの：

パソコン関係、読書、機械（特にIS）弄り、飴（オレンジ味）。

苦手なもの：

「劣化束（あるいはそれに類する呼称）」と言われること、言われたらキれます。

激しい運動（幼少時に身体が弱かつたことが原因）。

略歴：

肩先まで伸びた黒髪に黒い瞳、白い肌の少女、日本人形のようと見えられることがある容姿。顔立ちは双子の姉である篠にそっくり、ただし篠よりも柔らかい印象。

篠ノ之家の3女にして末娘、束の実妹にして篠の双子の妹。実家は剣道場でもある篠ノ之神社、ただ幼少時から身体が弱かつたため、双子の姉である篠と違つて剣道は習わなかつた。現在ではそれほど

身体は弱くないが、それでも激しい運動は苦手。あまり学校に行けなかつたので、学校生活に淡い期待あり。

IS開発者である実姉、束が世間から身を隠す（つまり失踪）する際、その姉によって拉致・誘拐される（おそらく、IS開発直後の重要人物保護プログラムから守るためと思われる）。この際、束は篠も連れて行くつもりだったらしいが、結果として楓のみが束についていくことになる。

その後、束と共に逃亡生活・研究生活を送ることに。そして15歳になつたある日、束がいつものように持つてきた「お願い」が、彼女に新しい扉を開かせることになる・・・。

人物：

2人の姉が大好き、2人の「お願い」を聞くのが自分の生きがいだと思つていて。

2人の姉はそれぞれが別分野で才能を開花させている（束はIS、篠は剣道など）が、身体が弱かつた頃から活動的な2人の姉が憧れだつた。そのためいすれの姉にも自分は劣ると考えており、ある種のコンプレックスを抱いている。特に双子でありながら身体も丈夫で強い篠に対しては、幼少時から強い憧れにも似た感情を抱いていた。だが身体的スタイルについては、神の不公平さを呪つていていたまにカツコつけで姉の頼みごとに「了解<sup>ロク</sup>」と返すが、これは幼い頃に読んだ小説の影響だとか。別に本人はミリタリーが趣味なわけでは無い。

将来の夢は「姉妹で宇宙を飛ぶこと」。

束の「ISは宇宙開発のため」という言葉を、本気で信じてる。だから軍事に使つてゐる今の世界には少し不満があるらしい。

他者との関係性（束に拉致される前の時点）：

対織斑 一夏・・・

実は直接の面識があまり無い、何せ幼少時はほぼ布団の中。とは言え、何度も顔を合わせたことはある。それと姉の篠が仲良くしていることや、束の親友の弟であることは知っている。個人的には、一応「お友達」カテゴリー。

対織斑 千冬・・・

長姉である束により、嫌と言つほど話を聞いた。引き合わせてもらったこともあり、回数で言えば弟の一夏よりも多い。束に連れ出されていた間も束から（過剰に）話を聞いていたので、「凄い人」と認識。個人的には、束の唯一の抑止力として尊敬している。

対篠ノ之 束・・・

上の姉、楓の全ての基となつた相手。まったく同じでは無いが一夏にとつての千冬が、楓にとつての束。大好きだが苦手、尊敬しているが何を考えているのかわからなくて怖い。連れ出されている間は、束によつて手ずからIS関係のスキルを学んだ。最も、教え方も宇宙的だつたが・・・。

対篠ノ之 篠・・・

下の姉、身体が弱かつた幼少時には憧れの的。篠のようになりたいと願つっていたし、篠も運動のできない妹の分も・・・と思っていた節がある。楓が束に連れ出されてからも、ちょくちょく連絡はつっていた。でも何だか、少し距離感が・・・。

IS（専用機）：「黒叢」（楓が把握している範囲内）

国籍：無 所属：無（名目上は篠ノ乃 束の個人所有）

\* 現在、国際IS委員会で対応を協議中。

楓の専用機、楓が束に連れられていた3年間で束から盗ん・・・学んだ技術を活用して基本設計した機体。そのため楓は「私の子供」！と呼んで可愛がっている。実姉、束のラボで製造、コアは束の個人所有の物を縁故で譲渡された（束曰く、妹へのプレゼント）。製造の過程で束からいろいろと調整を受け、世代としては第3世代相当の性能を持つ。

設計コンセプトは「ISを助けるためのIS（by 楓）」、しかし束は「ISを制するISだよん」と言つてゐるらしい。束が第4世代型の開発の直前に製造したいわば「過渡期」の機体と言つ側面も持つ。なお、束の「少し手伝う」の範囲がおかしいため、楓も把握していない機能がある可能性が高い。

機体色は黒、全体的に流線型で、肩先、腰部などが丸みを帯びたデザインになつてゐる。スラスターは腰部の後ろについている2基、それと背中に2基のタンクがあるが、これはナノマシン格納庫になつてゐる（用途については下記参照）。

待機形態は菱形の黒い指輪、楓は普段左手の中指に嵌めている。

ISの装備：（IS学園に提出するスペック・データより抜粋）

「黒叢」<sup>ブリセック</sup>の初期装備は2種類しか無い、と言うのも元々ISを補助・コントロールするために設計した「非戦闘用」のISだからである。そのため、楓本人は「お手伝いIS」と呼称。

「黒翼」：

単純に言つてソードビット、機体腰部に6基装備されている特殊な複合素材製の短剣型ビット。それぞれが固有のスラスターを持つており、自立した行動が可能。制御は原則として全自动、攻撃では無

く防御が主目的であり、至近距離での直接的な脅威からヒューマン搭乗者を守るために開発された兵装。また、全ビットを円環状に配置することで限定範囲にシールドを開くことができる。ただしシールドは一方向に一つしか展開できず、自動なため機械的な動きにならざるを得ない。

### 「黒叢」：

機体名の由来となつたシステム。

書類上は自機以外のISの機体内にナノマシンを侵入させ、エネルギー供給の効率化などを行う仕様。

製作者は束、「ニアの開発者である束だからこそ可能にした新世代装備」と言える。

使用時は「黒叢」の背中部分に搭載されたタンクの中に貯蔵されているナノマシンを、周辺に散布する。この際、散布したナノマシンの群れが影が広がるように見えることから、「黒叢」の名が付けられた。

\* 装備についてのせりて詳しい設定は、本編で少しずつ紹介する予定。

## 主人公設定（物語スタート時点）（後書き）

IS 装備元末夕

黒翼・・・ソードビット（ガンダム〇〇）

黒叢・・・名前と待機状態（伝説の勇者の伝説）

今後も、パロディ装備が出るかもしれません

その度、元ネタを公開していく予定です。

篠ノ乃 楓 :

第一回 桜の下の御提灯

これから頑張ります、よろしくお願ひします。

基本目的、東お姉ちゃんの瑕遺しです。

アハ、阿ハ靈う立ガナ。

えー、今後、ここ後書きでは作中登場のISとかの説明をしたりす

では、また本編で会いましょう。

・・・ 束お姉ちゃん、髪を二つ編みにするのやめて。

篠ノ乃 束：

## 第1話・「そのクラス、男女比率1・30」（前書き）

前書き、妹語録「一ナ一」。

妹「ねえお兄ちゃん、私、お兄ちゃんとパパ、どうののお嫁さんになるの？」

その日、我が家で戦争が起きました。  
最終的に母が「ソレスター・ビ・イング」のように武力介入、紛争は  
早期に終結致しました。

妹がまだ、小学生だった頃のお話です・・・。

## 第1話・「そのクラス、男女比率1・30」

第1話・「そのクラス、男女比率1・30」

Side 織斑千冬

・・・『IIS学園』、それはIIS操縦者育成のための特殊国立高等学校。運営と資金提供は日本国、しかしそこで得た技術は世界に公開する義務がある。学園内においては、いかなる国家も介入できることに表向きにはなっている。

IIS技術独占国である 正確には、「だった」 日本、そしてここIIS学園には世界中からIISを、技術を、人材を求めて多くの生徒が入学してくる。私の役目は、そんな連中を使えるように鍛えてやることだ。一応、教師だからな。

「まあ、正直・・・どうかとも思つが」

「ツツ、ツツ・・・そのIIS学園の敷地内を歩きながら、私はそう声に出す。

だがその声は誰にも届かない、と言つか、教師も生徒も入学式だからだ。

もちろん、私も先程までは入学式に出席していた、教員として。

本来ならそのまま担当する1年1組の教室に向かう所だが・・・実は1人、迎えに行かねばならない小娘がいる。

ただの小娘なら捨てている所だが、ただの小娘では無いからそういうかい。

「・・・束の奴・・・」

ここにはいない親友　　親友、か　　を罵りながら、私は思考を続ける。

ただでさえ今年は、「世界でIISを使える唯一の男」と言つ触れ込みで私の弟が入学してきているんだ。

1年1組、私が面倒を見る。

私のたつた1人の弟、家族、織斑一夏。

それだけでも手がかかると言うのに、ここに来てまた1人、面倒な生徒が増える。

篠ノ之 楓、私の親友でIIS開発者でもある束の妹。

妹と言うだけなら、すでに私のクラスには笄と言うもう1人の妹がいる。

問題は・・・今度の妹が、失踪中の束と行動を共にしていた可能性が高い、と言うことだ。

すでに政府の方からいろいろと言われている、私としても捨てておけない。

・・・個人的にも、だ。

「それを、メール一つで『よろしくサンキュー』だと？ 今度会つたら殺す」

もう数年間会つていらない上に、殺しても死なないだろうが。  
まあ、奴の考えていることなど私もわからん。  
メールには詳細な・・・そう、 unnecessaryまでに詳細な情報が添付さ  
れていたが。

「がつ・・・学校

・・・はあ。

顔を手で覆つて、私は溜息を吐く。

一夏だけでも、大変だと言うのに……。

そんな私の目の前には、正門ゲートの前で奇声を上げる1人の女生

徒

せめて、次女に似ていてくれればと願った私が馬鹿だった。  
ほつわ

何年かぶりに再会した、束お姉ちゃんの親友。それは何と、IS学園の先生だった・・・。しかも、出会い頭に出席簿で頭を殴られた。かなり、痛かったとだけ明言しておく。

「あう・・・私の脳が二つに割れるかと・・・千冬姉様、酷い・・・」

「ほう、良かつたな、これからは左右の脳で別のことが考えられるぞ・・・後、学校では織斑先生と呼べ」

「学校・・・そう、学校だ つー！ ぶぐつー？」

2撃目、しかも今度は角で・・・かなり痛い。

軽く泣きそう、あ、涙が。

「私に、同じことを2度言わせる気か・・・？」

「い、いえっ、大丈夫、静かにしまスー！」

びしつ、敬礼しもつて元気よく返事。

何年かぶりに再会した千冬姉様は、子供の頃よりもずっと厳しい人になつてた。

黒のスーツをビシッと着こなす、カッコ良い20代の女性。

名前は織斑千冬さん、束お姉ちゃんの親友さん。

子供の頃からの知り合い、今では「」、「」の先生・・・学園、「学校」。

そう、私は学校に来てるんだ・・・・・

子供の頃は良くて保健室登校、束お姉ちゃんに拉・・・連れ出されてからは逃亡生活。

ちゃんと学校に通つのは、実はこれが初めて！

「も、も、興奮するなって言つのが無理・・・・・」

「・・・・篠ノ之・・・・?」

「す、すみませんデス！」

再び出席簿を掲げる千冬姉様に、私は頭をガードしながら返事をする。

あ、アレは・・・アレだけはどうかお許しを・・・・・

・・・でも、学校に来れて嬉しいのは本当。

校門で興奮して叫んじゃつて、千冬姉様に叱られたけど。

束お姉ちゃんに教えて貰つた自己紹介も覚えたし、きっと大丈夫だよね。

お友達とか、できるかなあ・・・・・。

「あ、あの、千・・・織斑先生、入学式に間に合わなくて」めんなさい・・・・・

「それについては後で罰則を加える」

「あう・・・・・」

いや、だって束お姉ちゃんがいきなり言いだしたから準備が・・・。は、初登校でいきなり罰則・・・あ、でも結構、憧れてたかも。学校の罰則って、伝説のアレかな、トイレ掃除1週間？

「・・・束は

「はい？」

「束は、どうしてる？」

私が学校の罰則について考えていると、千冬姉様が束お姉ちゃんのことを聞いて来た。

やっぱり親友、お姉ちゃんのことが気になるのかな。  
お姉ちゃんが言つてた通り、本当はとても優しい人なのかも。

「えっと、ここに私を送り出した後、移動したと思つので・・・ど  
こにいるかは。あ、でも凄く元気ですよ、千冬姉様のことも良くお  
話してくれました」

「うう」

何故か、舌打ちされた。

あ、あれー・・・？

その後は、お喋りはせずに廊下を歩く。  
でもこいつは学校に来ること自体が初めてに近い私は、周囲をキョ

口キヨ口と見回す。

だつて、何もかもが新鮮で、珍しいんだもの！

今日からここが、私の学校！

・・・つと、興奮するとまた叱られる、落ち着かなきや。

「・・・新学期早々、騒がしいな」

「え？」

不意に、立ち止まる。

そこは、「1年1組」のプレートがかけられた教室の前。  
中からは、複数の声が聞こえて・・・。

「・・・大丈夫か？」

扉に手をかけた所で、千冬姉様が私に声をかける。

相変わらず厳しそうな声だけど、気のせいで無ければさつきまでは無かつた柔らかさを感じる。

・・・束お姉ちゃんの、言つてた通りの人。

「はい、大丈夫です！」

ハツキリと答えると、少しだけ笑つてくれた気がする。

・・・初めての学校、初めてのクラス。

もちろん、凄く凄く緊張するけれど、でも。

それ以上に・・・楽しみ。

これから、どんな毎日を過ぐる事になるんだね。

「・・・では、入るぞ」

ガララツ・・・千冬姉様が、教室の扉を開ける。

見ててね、東お姉ちゃん。

楓は、お姉ちゃんのために頑張るよ・・・！

Side 織斑 一夏

あの日、女にしか動かせないはずの『IIS』を動かしちぎった瞬間から、俺の人生は一変した。

変な黒服に『IIS』操縦者のための特殊国立高校、「IIS学園」に入学願書を押し付けられてから、選択肢も無いまま・・・ほとんど無理矢理、この学園に押し込められた。

「セシリ亞・オルコットですわ。」存知でしょうが、イギリスから派遣されて日本へ・・・

いや、「HS学園」と「藍越学園（学費の安さと就職率の高さが売りの私立高校）」の受験会場を間違えたり、勝手に置いてあった『HS』に触った俺にも悪い所はあったのかもしないけど。けどや・・・これは罰にしては重すぎると思うんだ、神様。

「あ、あの、お、大声出しちゃってごめんなさい。怒ってる？ 怒つてるかな？ 「ゴメンね、ゴメンね！」 でもね、あのね、自己紹介、『あ』から始まって今『お』の織斑君なんだよね。オルコットさんの自己紹介も終わつたからね、だからね、『お、ゴメンね？ 自己紹介してくれるかな？ だ、ダメかな？』

いや、別にそこまで謝らなくても・・・と言いたくなるほどに俺の目の前でオドオドとペロペロしているのは、俺のクラスの副担任、山田真耶先生。

低い身長、だぼっとした服に大きめの眼鏡、短い緑色の髪の女教師。・・・見た目的には、学生で通りそうな先生だな。

ここじで状況を再確認、今日はHS学園の入学式で初めてのクラス、絶賛、自己紹介中。

ここまでは良くある話だ、つまり次は俺が自己紹介する番と言つだけで。

未だにペロペロ頭を下げる山田先生に「大丈夫、ちゃんとしますから」と答えて、最前列ど真ん中と言つある意味最悪の席で立ち上がる。

ここまでは良い、極めて普通だ、問題は・・・。

「織斑一夏です、えー・・・よろしくお願ひします」

問題は、クラスメイトが・・・いや、全校生徒、教員から用務員に至るまで、ほぼ全員が女だと言つことだ！

実際、俺の他のクラスメイト29名は全員、女だ。  
そりや そうだよな、『IS』は女しか使えないんだから、その操縦者を養成する学校は女しかいに決まつて、おかしいのは俺だよ悪かつたな。

「えー・・・・・以上です」

ガタタタンッ、と何人かの女生徒がズッコケた。  
し、仕方無いだろ、他に女子相手にどんな自己紹介をしようとあれ？

その時、俺は窓際に座る女子と田が合つた。  
と言ひか、あの黒髪ボニー・テールは、確か・・・。

「・・・・篇？」

そう、篠ノ之篇だ。

小学校まで一緒だった、幼馴染と言う奴で・・・「凛とした」つて雰囲気がピッタリ当てはまりそうな、典型的な大和撫子。  
ただし、何と言ひか目つきが鋭くて睨んでいるように見える・・・  
性格は、見た目通り「キツい」。

「・・・まともに自己紹介もできんのか、お前は？」  
「は？・・・いつ！？」

突然、何か固い物で頭をはたかれた。

「、この速度、この容赦の無さ、そして声。  
もしかしてと思って振り向いてみれば、そこには思った通りの人物  
がいた。

「げえつ、関！？ じゃなくて・・・。

「ち、千冬ね・・・」

「学校では織斑先生と呼べ、馬鹿者が」

千冬姉ちふゆねえ・・・俺の実の姉が、そこにいた。

黒のスーツとタイトスカート、狼を思わせる眼差しとスラリとした  
体形。

笄とは別の意味の「鋭さ」を備えた、見るからに才色兼備な・・・  
と言うか、何でここに？

「あ、織斑先生、会議はもう終わられたんですか？」

「ああ、山田君、クラスへの挨拶を押し付けてすまなかつたな」

「・・・って、先生！？」

「先生って言ったか今！？ そ、そんな話、聞いて無いぞ・・・と、

俺が抗議するよりも先に。

クラスの女子達が、黄色い声を上げた。

「キヤ ッ、本物の千冬様！ 千冬様よー。」  
「愛します！」 「美しすぎます！」 「ずっとファンでした！」  
「私、お姉様に憧れて北九州からこの学園に来たんですよ！」  
「お姉様のためなら死ねます！」

・・・大人気、だった。

いや、まあ・・・仕方無いけどさ、でも当の千冬姉は「馬鹿が多い  
な・・・」とか言つてるし。

それをクールと勘違いしたのか、女子達はさらにヒートアップ。  
み、皆さん？ あれはポーズじゃなくて本気で言つてるんですよ・・  
・？

いや、「もつと罵つて」とか「躊躇へください」とか言つてる場合  
じゃ無くてね？

「ほら、静かにしろガキ共・・・ちよつとした事情で入学式に間に  
合わなかつた生徒を紹介する」

・・・あ、まだいるのか、どうせ女子だらうけど。  
女の中に、男が1人、しかも3年間。  
・・・いや、思つたよりキツいんだぜ・・・？

俺がそんな風にこれから先のことを思い悩んでいると、廊下から教室に入つてきて、千冬姉の隣に立つたのはやっぱり女だ。

肩のあたりまで伸びた黒髪に、シャープで綺麗な顔立ちだけビキニは感じない雰囲気。

むしろ、ほわほわと柔らかい感じ・・・制服はもちろんIIS学園、1年用の青いリボンが胸元で揺れる。

太腿まで覆う黒い靴下・・・オーバーハイって奴か？ 良く分からないけど。

・・・あれ？ でも何だかどこかで会ったような・・・？

「えーっと、篠ノ之楓です。何年か行方不明になつてましたけど、どうぞよろしく・・・はうつ！？」

すぱーんっ、自己紹介を始めた瞬間に千冬姉に頭をはたかれた。  
あ、少し親近感・・・じゃなくて、篠ノ之、楓？ 楓って言えば・・・。  
・。  
・・・・・  
篠の、妹の？

ゆ、行方不明だつたつて・・・俺は慌てて、窓際の篠の方を見た。  
・・・篠は、まるでそつぽを向くように窓の外を見ていた。

Side セシリ亞・オルコット（イギリス代表候補生）

織斑千冬、元IIS日本代表にしてIISの世界大会である「モンド・グロッソ」の総合優勝及び格闘部門優勝者、わかりやすく言えば元

「世界最強」。

現役を退いた後は、IJSの学園の一教師に甘んじてゐる……と言ふは言ふ、今でも彼女の崇拜者は多い。

『ブリュンヒルデ』……織斑千冬は、現役引退から数年経つても、敬意をもつてそう呼ばれます。

IJSのイギリス代表の候補生、つまりエリートである私も織斑千冬のことは認めざるを得ませんし、国からも「できれば仲良くするよう」と言い念められておりますわ。

「……であるからして、IJSの運用には……」

今は、山田先生がIJSの基本的に關する基本的な抗議をしてゐますわ。

織斑千冬……織斑先生は、教室の後ろで腕を組んで授業の様子を見ています。

そちらももちろん、気になりますが……私が国から氣にしりと言ふわれてゐるのは、別の人間。

織斑一夏、あの織斑先生の実の弟にして「世界で唯一IJSを動かせる男」……。

……でも正直、拍子抜けですわ。

基礎の基礎の部分の再確認の授業に過ぎませんのに、彼はそれについていけていない様子なのですから。

山田先生が「どこがわからない」と聞けば、「全部わからない」と答える始末。

その上・・・。

「・・・織斑、入学前に渡した参考書は読んだか?  
「古い電話帳と間違えて捨てました!」

・・・と、バカ丸出しで答えて織斑先生に殴られています。  
ISは現行の兵器を凌ぐ新時代の兵器、基礎知識も訓練も無しに動かせる物ではありませんのに。

本当にあの男がISを動かしたのでしょうか、ビリーテも信じられませんわ。

所詮、男なんてそんなもの。

このヒリートの私がこんな極東の島国に来たのは、あの男の調査も1つの目的ですけど。

正直、男であると言う以外に取り立てて報告すべき点は見つかりませんわね。

大体、男がISに乗るだなどと生意気に過ぎますもの。

今は、物珍しそうで優遇されて目立つていいだけ・・・。

「はい、では2時間目は終了です。休憩時間ですよ～

山田先生がそう言って、授業が終わりましたわ。

内容としては、代表候補生である私にはつまりませんでしたけど。

まあ、なかなかお上手な講義だったのでは無くて？

・・・本当は、男などに話しかけるなど、私のプライドが許しませんけれど。

1時間目の休み時間は、ポニー・テールの女子に先を越されて話しかけられませんでしたから、今、仕掛けることにしますわ。これも国のために、私のプライドは一時置いて、話を聞いてみることにしますわ。

「ちよっと、よひじくて？」

・・・本当は、嫌で嫌でたまりませんけど。  
ああ、代表候補生も楽ではありませんわね。  
私が声をかけると、その男は振り向いて・・・。

Side 篠ノ之 楓

東お姉ちゃん、私は今、凄く興奮してるよ。  
学校、しかも教室でちゃんと授業を受けられる日が来るなんて。  
子供の頃は病弱で寝たきり、それからは東お姉ちゃんについて行ってたから・・・。

人がたくさんいるのは少し怖いけど、それでもやつぱり楽しい。  
もつ、ソワソワしちゃつてもつ、押さえきれないよね・・・！  
おおつといけない、れつかも十冬姉様に叱られたし、平常心平常心・  
・・。

「ねえねえ、楓ちゃんって呼んでも良いい？」

「おおつ！？」

「・・・？ ビーハしたの～？」

「い、いえ、何でも無いです、何でも無いですよー。」

「そつか～、じゅあ良こや～」

早速、クラスの人に話しかけられた。

「、これは、お友達になるチャンス・・・かも。

私に声をかけてきたのは、何だかおつとりした感じの女の子。

袖丈がやけに長い制服 ある程度の制服改造は校則で許容  
を着た子で、ネズミさんの髪飾りをつけた長い髪に、とても異な  
うな目が特徴的。

・・・心無し、束お姉ちゃんに似てる気がする。

「あ、えつと・・・」  
「あ、私？ 私はねー、布仏 のほとけ 本音ほんねだよ～」  
「布仏さん、布仏さん・・・はい、覚えました」  
「ありがとー、でも本音で良いよ～」  
「どういたしまして、本音やん」

「おお、普通に会話ができる、ができるよ……！」

「このまま、お友達になれたりして……あれ？」

「……お友達って、どうやってなるんだり？」

「でねでね、楓ちゃんはどうして入学式に来なかつたのかな、かな？」

「え、えー……道に迷つて？」

「おお～、楓ちゃんは方向音痴さんなのかな？」

「ちん……ああ、いや、そんなはずは……」

ただ学校と言う物に興奮してただけで、普段は……道に迷うなんて。

「……ち、ちょっとだけしか。

それに千冬姉様にも会えたし、篠姉さんにだつて……ああ、そう、  
篠姉さん！

慌てて振り向くと、窓際の座席で1人、窓の外を見ている篠姉さん  
を見つける。

最後に会つた時と変わらない髪型と雰囲気、私のもう1人のお姉ち  
ゃん。

私がここに来たのは、束お姉ちゃんの「お願い」のせいだけ……  
でも、篠姉さんにも会いたかった。

年に2、3回くらい、電話で話すくらいしかできなかつたし、早速  
声を……。

「私を知らない！？」このセシリ亞・オルコットを？ イギリスの

代表候補生にして入試主席のこの私を…？ 私の華麗な自己紹介が胸に響かなかつたと…？」

急に大きな声がして、教室が静まり返つた。

何かと思えばこのクラス唯一の男子 わ、そう言えば一夏さんとも同じクラスなんだよね、声かけなきや の前で、金髪の女の子が凄く怒つてた。

かすかにホールのかかつた長い綺麗なプラチナブロンドと、透き通つた青い瞳。

歐米人特有の肌の白さとスタイルの良い身体、全身から「私、優秀です」なオーラを放つてゐる女の子。

セシリ亞・オルコットって名前は知らないけど…イギリスの代表候補生なんだ。

代表候補生は読んで字の「」とく、国家のIIS代表の候補生のことだよ。

オルコットさんが、今までに一夏さんに説明してゐる。

「つまり私は、ヒリートなのですわ！ 泣いて頼むなら、優しくしてあげても良くてよ？」

・・・えつと、アレは学校で友達を作る時に言つ台詞なのかな？ 良し、じゃあ私も早速、えつと・・・な、泣いて頼むなら。

「何せ私、入試で唯一教官を倒したヒリート中のヒリートですから

？」

「・・・入試つてアレか？ ISを動かして戦うつてやつへ！」

「それ以外に入試などありませんわ」

「あれ？ 僕も倒したぞ、教官」

「は・・・？」

ざわつ・・・な、何だか教室の雰囲気が。  
に、入試？ 入試・・・私は何か、束お姉ちゃんがいろいろしてた  
ことしかわからないけど。  
えつと、どれのことかな・・・？

「あ、貴方も・・・教官を倒したつて言つたですのー？ 入試で！」

？」

「あ、ああ・・・たぶん」

「たぶんつて何ですの、たぶんつて

」

あ、チャイムだ。

3時間目が始まる、オルコットさんは何か言いながら自分の座席に戻る。

「楓ちゃん、じゃあまた後でね～」

「あ、はい・・・また・・・」

そして当然、本音さんも座席に戻る。  
くう、お友達になり損ねた！

まあ、でもまた後でつてことは話しかけて貰えるつてことだ・・・。

「・・・あ

ふと、窓際の座席から篠姉さんが私のことを見ていることに気が付いた。

笑顔で小さく手を振つたら、ふいってそっぽを向かれた。

・・・あ、あれー・・・?

Side 千冬

3時間目は、ISで実際に使われる武装に関する講義・・・の前に、再来週のクラス対抗戦（もちろん、ISで、だ）のクラス代表を決めるつもりだつた。

・・・が、何だこの状態は。

「納得できませんわつ！－！」

どう言うわけか知らんが、オルコットが息を呑いている。

それはクラスのガキ共が私の弟・・・つまり一夏をクラス代表にしようと推薦を重ねた後のことだ。

・・・本人はやりたがっていないうだが、それはどうでも良い、

推薦された者に拒否権など無い。

オルコット曰く、男がクラス代表など恥さらし以外の何者でも無い。クラス代表はそのクラスの実力ナンバー1がなるべきで、それには代表候補生であり「専用機」持ちである自分こそが相応しい・・・と言つのが言い分だ。

まあ、「実力ナンバー1がなるべき」と言う部分には首肯してやっても良いが。

「物珍しさで男をクラス代表にするなんて・・・サークスじやありませんのよー? 大体、文化としても後進的な極東の島国で暮らさなければならぬこと自体、私にとつては耐え難い苦痛ですのに・・・!」

「イギリスだつて島国だし、大したお国自慢無いだろ」

口を滑らせおつたな、馬鹿者。

聞き流せば良いだろつて、一夏がオルコットの祖国を「侮辱」

先に日本を「侮辱」したのはオルコットだが したことに腹を立てたオルコットが、一夏に決闘を申し込んだ。

「・・・良いぜ、四の五の言つよりわかりやすい」

そして一夏も、それを受けたる・・・何だこの流れは。大体、一夏はまだ機体も無いと言つてのひびつ「決闘」するつもりだ、馬鹿が。

・・・まあ、一夏には政府が「専用機」を用意するらしいから、そこは問題無いだろうが。

・・・「専用機」。

代表・代表候補生や企業に所属する人間に与えられる専用のIS。特定の個人にしか使用できない、まさに「専用機」だ。

IS学園でも、「専用機」を持っているのは数える程しかいない。このクラスで言えば、オルコットと・・・一夏、そして・・・。

「・・・」

私の視線の先には、まだ実技試験を受けていないのに入学が確定している生徒がいる。

篠ノ乃楓、後で日程は伝えるが・・・ISさえ動かせれば基本は合格だ。

第一、アレは束の下でISについて叩き込まれた馬鹿だ。

一夏も似たような状態で入試を受けたが、それは形式として受けたに過ぎない。

その意味では、無意味な通過儀礼に過ぎない、が・・・。

・・・脳裏に、束の送りつけて来たデータの内容を思い浮かべる。

束は、本当に何を考えているんだろうな。

妹に個人所有の「専用機」を授けて、IS学園に送りつけてくるのだからな・・・。

はあ・・・疲れた。

今日の授業が終わって、自分に割り振られた寮の部屋に向かいながら、俺は溜息を吐く。

今日は本当に疲れた、女子にはジロジロ見られるし、変な奴・・・セシリア・オルコットだっけ？ には、突つかられるし。

しかも、来週の月曜に第3アリーナとか言つ場所で勝負しなくちゃいけなくなつた。

勝負自体は良いとして、EISバトル（最近はそつまつ名前の「スポーツ」として定着）なんてやつたこと無いし・・・大体、教科書すら専門用語ばかりでさつぱりわからない。

「・・・まあ、やるしかないな。男が一度決めたことを撤回するわけにやいかねーし」

教室でのことを思い出す、「男が女に（特にEISで）勝てるわけがない」と言わんばかりのあの雰囲気を。

クラスの女子は皆、「セシリアに頼んでハンデつけて貰つたら？」とか言う始末だ。

しかもしけは、嫌味でも何でも無く・・・当然のこととして受け止められている。

今の時代、男の立場は圧倒的に弱い、女尊男卑と言つても良いくらいに。

ISは現行兵器を鉄屑同然にした新時代の兵器、だからそれを扱える女性の立場が急上昇するのもわかる、IS（及び操縦者）の保有数が即軍事力・防衛力になる時代なんだから。

実際、ISを操縦できる可能性のある女性に対しては国も企業もこれでもかと言つくらいに優遇措置を取る、それもわかる。だけど・・・国家の軍事力になるからIS操縦者、つまり女性は偉くて男性はいらない。

・・・それだけは、何か違うと思つ。

「まあ、男と女で戦争したら男陣営は3時間で負けるだろ」  
「けど

悲しい現実を口にしつつも、俺は頬をぱたつと両手で叩いた。

いけないいけない、思考がマイナスになっちゃってたな。

とにかく、この1週間で基礎だけでも・・・き、基礎・・・基礎か・

・・。

「・・・はあ、東さんも面倒な物を作つてくれたよなあ

別に東さんが悪いわけじゃ無いけど・・・千冬姉の親友の顔を思い出す。

記憶の中にあるのは、何を考えているんだかわからない人を喰つた

ような笑顔。

・・・あの人 Gauss を開発したつて言つて、わからなくも無いけど、イマイチ実感がわかない。  
昔からやたらに天才だったのは覚えてるけど・・・そつだ、東さんだよ！

「 篠と・・・あと、楓か」

今日、6年ぶりに再会した幼馴染2人のことを思い出す。

・・・って言つても、篠とはガキの頃に通つてた剣道の道場で良く一緒にたたけど、楓とはあまり会つたこと無いんだよな。  
確かアイツ、身体弱くて・・・今は、どうだかわからんねーけど。

と言つたが、自己紹介の時の行方不明つて、アレ何だらうな？  
東さんは今も絶賛、失踪中だけど・・・。

小4の時に篠の家が引っ越してから全然連絡取つて無かつたから、今アイツらの家がどうなつているのかもわからないし・・・いやいや。

「 はあ・・・今日はもう良いや、とにかく寝よつ

とにかく、疲れた・・・もう寝たい。

えっと、千冬姉が用意してくれた寮の部屋「1025室」に向かつ。部屋に入った後、俺は真っすぐにベッドに向かつた・・・。

Side 篠ノ之 篇ばん

・・・6年ぶりに、一夏に会つた。  
休み時間にほんの少しだが、話せた。  
私だとすぐにつかつたと言つてくれた、髪型が同じだつたからと・・・  
・。

「・・・良く、覚えていたものだ」

私の髪は、頭の後ろで結んでも腰もある程に長い。  
それこそ、子供の頃から変えていない・・・もしかしたらと、思つ  
ていたから。

一夏と会えた時、すぐに気が付いてくれるだらうかと・・・。

・・・はつ・?

いやいやいや、一夏は関係無いぞ、一夏は、うん。

私は単純に、この髪型が気に入つてゐるだけだ、それだけだ、うん・・・まあ、覚えていてくれて、良かつたと思わなくも無いが。  
いやいや・・・軽く頭を振つて、私はリボンを解く。

制服と下着を脱いで、タオルを手に寮の部屋のシャワールームへ。

「・・・ふう」

熱い湯のシャワーを浴びると、小さく息を吐く。

ぼんやりと湯を浴びながら考えるのは・・・やはり、一夏のこと。

当たり前だが、6年前とは何もかも違つ。

記憶にあるよりずっと大人で・・・そして、男らしくなつていた。

ニュースで見た時は、本当に驚いた。

忘れるはずも見間違えるはずも無い姿がテレビに映つたのだ、驚きもする。

世界で初めて、ISを動かした男として・・・。

「・・・だが

キュッ・・・蛇口を捻つて、湯を止める。

ポタポタと髪先から垂れる零を見つめながら、私はもう一人のことを考えた。

そのもう一人とは・・・楓のこと。

この数年間、姉さん・・・「IS開発者」篠ノ乃 束と行動と共にしていただろう、双子の妹。

年に2回か3回、短い時間だが電話で話したことはある。

姉さんは、一度も話したことが無いが・・・いや、それ 자체はどうでも良い。

もつと、重要なのは・・・。

「・・・楓・・・」

・・・昔は、身体の弱かつたあの子のためにと世話を焼いたこともある。

それなりに、姉妹仲は良かつたと思ひ。

少なくとも、私と姉さんの関係よりはマシだったはずだ。  
だけどあの日、姉さんが楓を連れ出して、どこかに消えて・・・それで。

・・・ボスンツ。

・・・?

今、シャワールームの外から、何か音がしたか？

「誰か、いるのか？」

シャワールームの外に声をかけながら、バスタオルを身に纏う。  
・・・ああ、そう言えば今日から相室になるんだったか、元々2人  
部屋だしな。

となると、外にいるのは同室になる者か。  
まあ、1年間一緒に生活するんだ、それなりの関係を築いといった方が良いだろう。

「・・・」んな格好ですまないな、私は篠ノ乃箒と・・・

シャワールームの外に出て、部屋の中にいるだるう同居人に向けて挨拶する。

そして濡れた髪を払いながら顔を上げると、そこには・・・。

Side 篠ノ之 楓

放課後、私はホクホク顔で寮の廊下を歩いていた。

と言うのも、本音さんが彼女のお友達に私を紹介してくれて、その子達とも仲良くなれたから。

これって、お友達になれたってことかな？

だとしたら嬉しいなあ、同年代の女の子のお友達なんて初めてだから。

束お姉ちゃんはお友達とかいらない人だけど、私は普通に嬉しい。明日は私の実技試験をやるって千冬姉様が言ってたけど、EISが動かせれば良いらしいから。

えっへへー、お友達げっと！

そして同時に、購買つて所でドロップ缶もげっと！

「学校つて楽しいなあ、本当に本当に楽しいなあ」

私のだつて言う寮の部屋に戻つたら、束お姉ちゃんに秘匿通信で教えてあげないと。

まあ、メールを送り合ひだけで電話とかじゃ無いけど・・・でも、その前に。

篠姉さんに会いたいな、昼間は結局、話せなかつたし。

電話で話せなかつたこととか、近況報告とか・・・束お姉ちゃんのこととか、いろいろ。たくさん、お話しすることがあるからね。えーっと、千冬姉様によれば姉さんの部屋は「1025室」で・・・。

「かりつとね・・・」

口の中に早速一粒、飴を放り込む。

普段は地図に弱い私も、飴を舐めてる間は大丈夫。

糖分を摂取した脳が活性化して、断然OKな状態に・・・。

「・・・お?」

とぼとぼ歩いていると、廊下に人だかりができている場所を見つけた。

廊下のそれぞれの部屋から女生徒が顔を出して、一つの部屋を見ている。

その部屋からは、何かドタバタと言づ音が・・・かりつと、飴を上下の歯の間に入れてカリカリする。

次の瞬間、激しい物音がしていた部屋から何かが転がり出て来た。

・・・ドアが物凄い勢いで開いて、何かがまさに「転がり出で」きた。

それは反対側の壁に激突する「いってえ！？」と、唸りながら身悶えてた。

と言つが、一夏さんだつた。

かりつ・・・小さくなつた飴玉を、噛み潰してから飲み込む。

「・・・あつ、もしかしてこれつて、最近の学校で流行つてる何かのゲームで

「んなわけ無いから！・・・つて、楓？」

「お久しぶりです、一夏さん。實に久しいのですが、ゲームで無いならいつたい何を・・・と言づか、篠姉さんはどこにいるか知りません？」

「・・・まさに今、その筈に殴られた所なんだが・・・

「お？」

一夏さんの指差した先には、何故か剣胴着姿の篠姉さん、手には木刀を持つてる。

もしかしてあの木刀で一夏さんを殴打したのかな、だとしたら凄く

危ないよ簞姉さん。

長い髪に鋭い目、数年ぶりに会つ私の双子の姉が、そこといた。

「簞ね・・・」

声をかけようとしたすると、簞姉さんは即座にドアを閉めた。

私を一瞥して、驚いた顔・・・それからキツい顔になつて、即座に。  
・・・あ、あれ？

「・・・機嫌、悪かったのかな・・・？」

「まあ、良くては無いだらうけど」

一夏さんは、簞姉さんに何をしたのか・・・でも、今の簞姉さんの態度は、あくまで私に向けられていた気がする。

その後聞いた話だと、簞姉さんと一夏さんはこれから同じ部屋なのだとか。

あー、私知ってるよ、同棲つて言つんだよねそれ。

・・・結局。

その日は、簞姉さんと一言も話せなかつた・・・。

## 第1話・「そのクラス、男女比率1・30」（後書き）

篠ノ之 楓：

はい、どうも、楓です。

今日は、ウチの家と家族環境について説明したいと思いまーす。 束お姉ちゃん、篠姉さんの事以外はあんまり教えてくれないので、自分で調べてみました。

篠ノ之家・・・

篠ノ之家は、神社の神主の家系です、つまり私達姉妹は巫女さんなんですね。

私と束お姉ちゃんは全然ですけど、篠姉さんはお神樂を舞つたりしてましたよ。ご近所ではお祭りとか・・・割と親しまれてた家みたいですね。あと、剣術道場もしてましたよ、篠ノ之の流派はもともと、女性のための古い剣術でして。神に捧げる舞と古武術がくつついて剣術に変わったらしいです、剣舞・・・と言つよつな意味で。だから私達姉妹の中では、篠姉さんだけが正統な篠ノ乃流の継承者たり得ると言うわけですね。

で、家族。

私は束お姉ちゃんと世界を巡つてましたが、篠姉さんはずっと日本に。政府の重要人物保護プログラムで両親と各地を転々としてたらしいですね。束お姉ちゃんがプログラムの実行機関に「何か」してからは、千冬姉様のいるIS学園に・・・と言つ感じだそうです。でも、何故か両親はそのまま政府の保護下に放置・・・まあ、束お姉ちゃんにも何か考えがあるんだろうけど・・・。

篠ノ之 楓：

はい、今回はここまでです。

次回から、学園生活がスタートですね。

えーと、私は束お姉ちゃんにいろいろと教えて・・・。

あれ？ データ消えてる・・・。

篠ノ之 束：

データは全部頂いたぜー！ ばーい、束おねーちゃん。

篠ノ之 楓；

えええ  
・  
・  
・  
。

## 第2話：「クラス代表決定戦・前編」

第2話：「クラス代表決定戦・前編」

Side 織斑 一夏

入学式の翌日、つまりは俺が幼馴染の篠との同居（と言いつか、同室？）になつてから一晩。

あれ以来、篠が機嫌が直してくれない。

確かにシャワー上がりの姿を見てしまったのは俺が悪い・・・悪いのか？ むしろ幼馴染とは言え年頃の男女を同室にする学園側に問題があるんじやなかろうか。

まあ、この学園はそもそも男が通うことを見定して無いからな・・・。

何せ、男性用トイレも無いってんだから・・・あと、大浴場も使えない。

どこを見ても女性、女子、女・・・。

ちなみに物心ついた頃から親がおらず、千冬姉と2人暮らしだった俺は女子に夢を見る程ウブじやない。

なので、リアルに疲れるばかりで・・・。

「・・・と言つわけで、ISは宇宙での活動を想定して設計されてるので、特殊なエネルギー・バリアで身体を包んでいて・・・」

ちなみに今は授業中、セシリ亞との決闘に向けて頑張りつつ意氣込んで見た物の。

・・・さっぱり、わからない。

千冬姉に貰つた参考書で予習した分、単語がわかる程度で・・・根本的な所が、さっぱり。

だけど他の皆はうんうん頷いてるし、理解できる様子だ。つまり、俺だけがついていけない。

窓際の幼馴染、筹を見ても・・・特段、困った様子は無い。つまり、今やつてるのはそれくらい基礎なわけで。

・・・結論、俺1人じゃどうにもならない。

「それからE-Sにも意識のような物があつて、対話・・・つまり、一緒に過ごした時間だけ、わかり合う・・・操縦者の特性を、把握しようとするわけなんですね。これがいわゆる『コア』に経験を積ませると言わることで・・・練習は裏切らないと言つことですね」「先生、それって彼氏彼女みたいな関係ですかー？」  
「え、えー・・・と、そうですね。でも私は経験が無いので、わからりませんけど・・・」

彼氏彼女・・・恋人とか恋愛とか、そう言つ話になると空気が華やぐ。

と言つたか、甘くなる・・・色で言つと黄色か桃色？

一言でいえば、「女子校」的な雰囲気。

まあ、男つて俺1人だしな・・・むしろ、俺が邪魔な感じだ。

その割に、周りから物珍し気にジロジロみられるもんだから……困る。

何と言つか、いたたまれない。

「んんっ、山田先生、授業の続きを」

「は、はいっ」

教室の後ろに立っていた千冬姉が、咳払い一つで教室の空気を引き締める。

このあたりは流石だと思つ、おかげで助かった。

俺は小さく息を吐くと、教科書に目を戻して……。

・・・せっぱり、わからなーい。

まあ、ここに来て初めてE.Sの勉強を始めたわけだから、仕方が無い、はず。

でもセシリアとの勝負は、来週なわけで。

困り果てた俺は、もう一度、簞の方を見る。

「・・・」

一瞬だけ目が合つて・・・って、おい、目を逸らすなよ、傷付くだろ。

はあ・・・とにかく、簞に教えてくれるよう頼んでみよつ。同じ部屋だし、教えて貰う分には不自由しない・・・と、思つ。千冬姉に頼んでも教えてくれるだらうけど、忙しいだらうじ・・・

巔原だと思われるのもアレだし。

でも筈つて、まだ機嫌直つて無い、よな？

憂鬱な気分になりながら、教室を歩く山田先生の姿を追いながら少し後ろを見る。

すると、視界の隅の座席に見た顔がいた（いや、クラスメイトは全員見た顔だが）。

筈と似た顔だが雰囲気は真逆、むしろ東さんに近い幼馴染。篠ノ之楓・・・何故か背筋を伸ばして二ノ二ノしながら両手で教科書を開いてる。

・・・何がそんなに楽しいんだ・・・？

「・・・はあ」

溜息を吐いて前を向いて、教科書のページを開きながら、ふと昨夜のことを思い出す。

筈に会いに来たらしい楓と、少しだけ話した。

筈自身は、どうしてか楓と会おうとしなかつたけど。

・・・後で聞いても、筈はその件については何も答えてはくれなかつた。

まあ、元々機嫌、悪かつたしな。

で、楓からは東さんが元気だと言つことを聞いた。

その人が元気で無い所が想像できないけど、元気だと聞いて悪い気はしない。

楓もすっかり身体も良くなつたつて言つし、良いことずくめだ。

何はともあれ健康が一番、だからな。

### Side 篠ノ之 楓

はあ 、「授業」って楽しいなあ！

こう、本当に教科書に沿って進めて行くんだね。  
学校にあんまり来たことが無いから、感無量だよ。

まあ、でも・・・ぱらぱら、教科書をめくつてみる。

・・・ISを完全に「兵器」扱いしてるのは、ちょっとだけ不満。  
だって、東お姉ちゃんはそんなことのためにISを作ったわけじゃ  
無いもの。

「おお～、楓ちんが～機嫌だお～」

「うんっ、学校つて面白いね！」

「はわ～、え、笑顔が眩しい～」

休み時間には、お友達とお喋り。

本音さんはお友達が多い人みたいで、おかげでたくさんのお友達に  
紹介して貰えた。

本音さんには感謝感激、ちなみに本人が私に声をかけてきたのは。

「生徒会長に聞いて、興味あつたからだよ～」

とのこと。

ははあ、生徒会長、私の入学資料でも見たのかな。  
実技試験、まだだけど。

何でも本音さんは「生徒会」のメンバーで、しかも整備科志望なの  
だとか。

ちなみに、私も整備科志望。

2年生からは科が別れると言つた話で・・・本音さんはお姉さんが整  
備科にいるとか。

私も東お姉ちゃんの影響で工では動かすより整備したりする方が好  
きで・・・親近感が湧く。  
私がそう言つた。

「じゃあ今度、かんちゃんを紹介するよ～」

「かんちゃんさん?」

「うん、4組の子。きっと仲良くなれると思うよ～」

本当に本音さんはお友達が多い、まだ学校が始まつて2日目なのに。  
うーむ、この間延びした独特な喋り方が人を引き寄せるのだろうか。  
・・。

私も、見習つた方が良いかな・・・?

「ええ

つ、織斑君つて専用機が貰えるんですか!?

「1年の、しかもこんな時期に！？」

その時、一夏さんの周辺から大きな声が聞こえた。  
そこには千冬姉様と山田先生もいて、前者はつるわせつて、後者はアワアワしながら一夏さんに話しかけてる。

「・・・で、だ。本来なら専用ISは国か企業に所属する人間しか与えられないが、お前は状況が状況なので、データ収集を目的として専用機が用意されることになった。理解できたか？」

「な、なんとなく・・・」

専用機、専用IS。

読んで字の如く、個人に与えられる専用のISのこと。

ISはニアの数（467個）しか作れないから、つまりはどう頑張つても世界で467人しかISを持ってない。

東お姉ちゃんは、467個目を作つてからは国にも企業にも提供しなくなつたから・・・。

世間的にはいろいろ言われてるけど、個人的には飽きただけだと思う。

「あ、あの、先生。篠ノ之さん達って、篠ノ之博士の関係者なんでしょうか・・・？」

「ああ、2人ともアイツの妹だ」

おおつと、いきなり個人情報漏洩・・・いや、別に隠していないけど。

束お姉ちゃんは、工の「アが作れる唯一の人間。

そして、今も失踪中（今や私にも居場所がわからない）。

でもいろいろ言われるかと思つたけど、思つたほど私、何も聞かれなかつたな・・・。

「す、すごい、このクラス。有名人の身内だらけじゃん！？」

「ねえねえ、篠ノ之博士ってどんな人？ やっぱり天才！？」

「篠ノ之さん達も天才だつたりする！？ 今度工の操縦教えてよ！」

「！」

そして、にわかに活氣づく1年1組。

篠姉さんと、あと私の所にもたくさんの女生徒がやつてくる。

おお、こんなにたくさんの人には圉まれると・・・緊張する。

子供の頃も束お姉ちゃんと一緒にいた時期も、人に圉まれた経験がないから。

でも、束お姉ちゃんは本当に人気者なんだね。

それは嬉しい、だから私は話せる範囲で束お姉ちゃんのことを・・・。

「あの人は関係無い！！」

耳元で叫ばれたかと錯覚するよつた、大きな声。

声の主は、篠姉さん。

「……大声を出してすまない。だが、私はあの人じや無い。教えられるよつな」とは何も無い

静まり返る教室、篠姉さんは足早に歩き出して……どうしてか一旦、私の方へ。

お、お……？

何か話しかけられるのかと思えば、私の目の前を通り過ぎてそのまま廊下へ。

篠姉さんに押しのけられるような形で、私に寄ってきていた生徒が私から離れる。

・・・?

「ね、姉さ……」

声をかけようとしても、にべも無く教室の扉が閉められる。  
うつ・・・昨日もだけど、今日も篠姉さんと話せないかも……。  
と言つた篠姉さん、授業だよー・・・?

「……ほり、不満そつにするなガキ共、授業だ授業」

後には、千冬姉様の手を打つ音が、虚しく響く……。  
と言つた、不満つて何?  
不満そつにする箇所、どこにあつたかな?

Side セシリ亞・オルコット（イギリス代表候補生）

男が、生意氣にも専用機！

物珍しさデータほしさでの提供と言ふことらしいですが、それにしても不愉快ですわね。

専用機持ちと言ふ意味で、あんな男と私が同格に置かれたと言つことなのですもの・・・。

・・・まあ、良いですわ。

専用機持ちにも、格の違いがあることを教えて差し上げますわ。

それに同じ条件で戦つた方がフェア・・・そして嫌でも実力の違いを思い知るでしようから。

男が女に勝てるなんて、あり得ないのだと言つことを。

「安心しましたわ、まさか訓練機で対戦するとは思つていなかつたでしようけど？」

授業が終わつた頃を見計らつて、あの男に声をかける。  
織斑一夏、不愉快にも世界中が注目していると言う男に。

「私も専用機持ちですから？ 訓練機を相手にするのもフェアではありませんからね」

「へー・・・・」

「馬鹿にしてますの?」

「いや、すげーとは思つけど・・・どうすげーのかがわからないだけで」

それを一般的に、馬鹿にしていると言つのではなくて!?

・・・ふう、いけませんわ、庶民、それも男に感情を乱すなんて私らしくも無い。

ま・・・男ですから、知らないのも無理はありませんわね。

専用機は、極端に言えば世界人口60億の中で選ばれた467名にしか与えられない稀少な機体。

代表候補生の中でも、専用機を「えられるのは私を含めてほんの一握り。

すなわち、Hリート中のHリートにしか「えられない特権。女性優遇のこの時代、専用機持ちはある意味で国家首脳よりも強い権限を持っていますのよ?

それを、こんな男などに・・・本当に氣に入りませんわ。

「・・・そう言えれば貴女、篠ノ之博士の妹さんなんですってね?」

どう言つわけかこの男・・・織斑一夏の傍にいる篠ノ之篠と言つ少女に、声をかける。

入学時に見た名簿と自己紹介の時にもしゃと思つていましたが、先程の休憩時間の騒動で言質を取れましたもの。

何しろ、日本人の名前の特徴とか、まだ良くわかりませんの。

とにかく、この篠ノ之箒と言つ少女はあの稀代の大天才、篠ノ之東博士の妹。

ISの開発者にして世界唯一のニア製造者、各国が血眼になつて探している、あの篠ノ之博士の。

ISの保有数が軍事力の大きさに直結する現在、篠ノ之博士を味方に引き入れた国家が霸権を握るのは自明。だからこそ、その妹である篠ノ之箒はイギリスの人間として放置できぬい・・・。

「妹と言つだけだ」

「・・・ま、まあ、どちらにしてもこのクラスの代表に相応しいのは私、セシリ亞・オルコットであることをお忘れなく」

とりあえず言いたいことは言いましたし、こんな男の近くからはとつと離れるが吉ですね。  
・・・べ、別に篠ノ之箒の田つきに気圧されたわけではありませんでしてよ?

そこの所、誤解無きよつこ。

・・・後で、もう一人の妹さんの方に声をかけましょつ。  
篠ノ之箒よりは、とつつきやすそうでしたもの。  
・・・いえ、別に篠ノ之箒が怖いとかそつまつわけではなくてですね・・・。  
とにかく、誤解無きよつこ!

昼休みになると、一夏は私を昼食に誘つてきた。

私は良いと言うのに、無理矢理・・・他のクラスメイトも誘おうとした所を見るに、今日の休み時間での一件以来クラスで浮いていた私をフォローしてくれようとしたのだと思う。

好意は嬉しいが・・・クラスの女子は私では無くて一夏と食事に行きたかっただけだと思う。

だから良いと言つたのに、一夏は私の手を離してくれなかつた。結果、恥ずかしさの余りに、その・・・古武術で一夏を床に投げてしまつた。

それを見たクラスの女子は散つてしまつて・・・一夏は溜息を吐いていた。

わ、悪いことをしてしまつたか、呆れられてしまつたらうか・・・？

「良し筈、飯を食いに行くぞ」

「い、いや、私は良いと・・・」

「黙つてついてこい」

「・・・む」

そして最終的には、一夏と2人きりで食堂で昼食を取ることになつた。

いや、別に2人きりになるのを狙つたわけでは無くて……そう、これは一夏が無理矢理、故に私は悪く無い。

「良いか？頼まれたからつて俺はこんなこと、普通はしないぞ？  
幕だからしてるんだぞ？ 幼馴染で同門なんだからな」  
「べ、別に……頼んで無いだろ」

幼馴染で、同門だから。

一夏はそう言つた。

私の家は、剣道の道場をやつしていく……子供の頃、一夏とそこと一緒に

一緒だった。

男子にイジめられていた私を、助けてくれたりとか……まあ、

いろいろあつた。

・・・懐かしい、な。

楽しかつた、毎日がドキドキして……本当に。

・・・姉たばねさんが、ISなんか作るまでは。

そのせいで、一夏とも、父さんや母さん、それに楓……離離れに、一家離散だ。

私の幼少時代は、そこで終わったんだから。

「やつこやわあ」  
「・・・なんだ」

いけない、せつかく一夏が昼食に誘つてくれたのに。

私は慌てて定食の味噌汁に口をつける。

「ISのこと教えてくれないか？ そのままじゃ来週の勝負で何もできないまま終わっちゃう

かつ・・・と、身体が熱くなるのを感じた。  
一夏が私に、ISのことを教えてほしいと頼んできた。  
だけど私は。

「くだらない挑発に乗るからだ、馬鹿め」

違う、こんなことが言いたいわけじゃないのに。  
・・・自分が嫌いになりそうで、ほうれん草のおひたしを箸でつつ  
く。

「頼むよ、篠、なあ・・・」「ねえ、キミ」・・・へ？ 僕ですか？  
「キミって噂の子でしょ？ 代表候補生と試合するって本当？」  
「・・・？」

その時、先輩 リボンの色からして、3年生 が1人、話  
しかけてきた。

名前も知らない、たぶん、一夏も知らない。  
良く分からぬが、一夏の隣の椅子に団々しく座つて・・・な、何  
なんだ？

「キミのてせ、HS稼働時間いくつくらい?」

「え? えーと、20分くらい?」

「それじゃあ無理よ、稼働時間=上達・強さだもの」

HSの稼働時間は、操縦者の熟練度に比例するのは確かだ。  
昔でいえば戦闘機乗りの飛行時間、それはHSでも変わらない。  
代表候補生クラスになれば、300時間は最低でもHSの稼働訓練  
を受けているだろうな。

「・・・で、さ? 私が教えてあげようか、HSの『ト』  
「・・・!」

突然、その先輩がまるでか、一夏に身体を擦り寄せるようにそんな  
ことを言った。

さつきとは別の意味で、身体が熱くなる。

一夏自身は特に何も感じていないような顔をしているが、私は気が  
氛じや無い。

「結構です。私が教えることになっていますので」  
「あ、教えてくれるの?」  
「あれ? でも貴女1年生でしょう? 私の方が上手く教えられる  
と思うよ?」

先輩の言葉に、たじろぎをうつになる。

確かに、1年生が教えるよりも3年生が教える方が良いと考えるのが普通だ。

それに私自身、そこまでE-Sに乗った経験があるわけじゃない。少なくとも、代表候補生クラスには及ばない。

だけど、このままだと一夏がとられる。

せっかく、一夏と話ができるのに・・・何か、何か無いか。

私が3年生よりもE-Sについて詳しいと、わかる何か・・・。

「・・・私は」

・・・どれだけ考へても、1つしか無かつた。

でもそれは、とても身勝手で・・・本当に、嫌で。

だけどそれしか思いつけない自分が、とてつもなく・・・。

「私は、篠ノ之束の妹ですから」

さつき、クラスであれ程「関係無い」と啖呵を切つておきながら。都合の良い時だけ、姉さんの名前を出す。

「篠ノ之束・・・え、ええ！？」

「・・・ですから、結構です」

「そ、そ、う、そ、れなら、仕方無いわね」

先輩が、私の言葉に・・・姉さんの名前にたじろいで、去つて行く。その背中を見つめながら、私はどうしようも無く嫌な気分になつていた。

「何だ・・・教えてくれるのか?」

「やつ言つている」

一夏の言葉に叩きつけるようにやつ返して、私は再び味噌汁を啜つた。

・・・一夏の顔を、見れなかつたから。

Side 一夏

放課後、幕に剣道場に来いと言われた。

いや、俺はISのことを・・・と言おつとしたら、「一度、腕が鈍つていなか見たい」と返された。

その後は「見てやる」の一点張りだったもんと、俺は了承するしか無かつた。

千冬姉と言い幕と言い、俺の周りには強情な女しかいない。そう言つ運命なのかもしれない、やれやれだ。

「行くぞ」

「ああ」

放課後、剣道の道着やらタオルやらを取りに一旦、寮の部屋に戻つた。

・・・まあ、つまりは同じ部屋なのだけれども。

やつぱりこれ、問題あるよなあ・・・。

籌だつて嫌だろ? 早く個室を用意してくれない物か・・・。

いや、本当は個室が用意できるまでは自宅通いの予定だつたんだよ。でも家にいると日本政府とか各国大使館とか研究所から、「生体を調べさせてほしい」って人が押し掛けてくるんだよ、誰が頷くか馬鹿。

いくら「世界初の男性IS操縦者」だからって、人を実験材料みたいに言うなよ。

・・・で、千冬姉によつて無理矢理、筹の部屋に押し込まれたわけ

で。普通、女の子いれるだろ・・・妹の楓とか、でもそつ言つたら。

「姉妹や血縁者を同じ部屋にしてはならない」

・・・と言つ規則を示されて、そつですかーと呟き下がりざるを得なかつた俺である。

ああ、そうだ楓と言えば・・・。

「・・・ なあ、 篠」

「なんだ」

「楓とは話したのか?」

「・・・」

「・・・ おーい」

「・・・ ・・・」

・・・ 無視ですか、 そうですか。

束さんのこともさうだけど、 篠は楓のことが会話に上ると黙つちまうんだよな。

篠と2人、 寮の廊下を歩きながら腕を組んで考える。  
えーっと、 確か束さんがEISを作った小4の頃に転校してからのことを、 僕は良く知らないんだよな。

日本政府の重要人物保護プログラム・・・ だけ? で、 いろんな場所を転々としていたってことしか。

だから中3の時、 新聞で篠が剣道で全国優勝した記事を見た時は驚いたぜ。

・・・ いや、 今はその話は良いな。

しかしアレだ、 親に捨てられて千冬姉と2人暮らしだった俺に言わせるとい、 姉妹仲が良くないって言うのは気になるんだよな。  
どうにか、 話だけでもさせられない物か・・・。

「なあ、 ほう・・・ き?」

「・・・

その時、篠が立ち止まつた。

表情は強張つていて、その視線を追つと・・・そこには。

何人かの生徒に囲まれた、楓の姿があつた。

何してんだ、アイツ・・・?

Side 楓

・・・どうしよう、束お姉ちゃん。

今日も、篠姉さんとちゃんとお話できなかつたよ・・・!  
数年ぶりの再会だから、もう少ししゃべ、何かあると思つてたんだけ  
ど。

「束お姉ちゃんだったら、有無を言わさず抱きつこて来るのに・・・

」

そんなことをブツブツと呟きながら、寮の自分の部屋から篠姉さんの部屋に向かつ。

まあ、良く考えてみれば篠姉さんは束お姉ちゃんと違つてスキンシップとか好きじゃ無かつたしね。  
むしろ束お姉ちゃんが過剰だと思つ。

あれ？ じゃあ篠姉さんの反応が常識のある普通の行動なのかな・・・

・?

それはそれとして今田さん、篠姉さんとつかさんとお話ししないこと・・・

東お姉ちゃんから、篠姉さんここにこりこりと話しても頬まわしてゐじ。何より、私が篠姉さんとこうこうお話ししたいし。

「あ、あのナージャない？」

「ホント、噂になつてゐる子？」

「・・・お~」

途中、寮の廊下で何人かの生徒に鉢合わせた。

私と色の違つリボンをつけてるから、上級生だね。2年生か3年生かは、ちょっと自信が持てないけど。

「ねえねえ、ちょっと良い？」

「あ、はい、何でしよう？」

「貴女、篠ノ之博士の妹さんって本当？」

「えーっと・・・あ、はい、そうです

尊と何のじとせりあひつぱりだけば、東お姉ちゃんの妹つて意味な  
うの通り。

隠す意味も無いし、と言つたか調べれば一発だしね。

学校つて尊が広まるの早いつて聞いてたけど、本当なんだね。

ちょっと感激、生で見れるなんて。

私が頷くと、先輩方は黄色い声を上げる。  
おおう、ちょっと耳に来た。

「ねえねえ、篠ノ之博士ってどんな人？」

「やっぱり天才？ 頼んだら会わせてくれたりする？」

「と言うか、貴女も当然工系に詳しいのよね？」

矢継ぎ早の質問、どれもこれも答えににくい物ばかり。  
まず、東お姉ちゃんがどんな人かって言われても困る。

私のお姉ちゃんで・・・そりゃあ天才なんだけど、でも私からしても変な人だし。

会いたいとか言われても、私も居場所知らないし。  
と言つたが、私もだけど東お姉ちゃん、出てきたら捕まるんじや無いかな。

この間なんて、どこの国の戦闘機に撃墜されそうになつてたし。

で、最後のは・・・私が東お姉ちゃんに及ばないのは私が一番良く知つてるし。

私が知つてることなんて、基本的には教科書に全部書いてるし。

・・・それ以外で、何を聞きたいのかさっぱりわからない。  
うーん、でもちゃんと答えないと・・・。

「・・・何をしていろんですか？」

その時、聞き覚えのある声がした。  
顔を上げると、そこにいた。

「・・・篠姉さん」

剣道の道具らしい荷物を持つ篠姉さんと、一夏さんがいた。  
一夏さんはのほほんとしてたけど、篠姉さんの目が凄く険しい。

「篠つて・・・あ、もう一人の方じや無い？ あと、男の子だ・・・」

「ホント？ ねえ、貴女も篠ノ之博士の妹さん・・・」

「妹と言つだけですが、何か？」

「あ、いや・・・」

ギロリ、そんな擬音が聞こえて来そなぐらの目つきで先輩方を睨みつける篠姉さん。  
隣で、一夏さんが溜息を吐いてる。  
篠姉さんの剣呑な雰囲気に呑まれたのかどうなのか、先輩方はそそくせと去つて行つた。

「あ、えと、篠ね・・・」

「・・・」

「スタ、スタ、スタ・・・ 篠姉さんは私の横をあっさり通り過ぎて行つた。

・・・ま、またお話できなかつた。

「あー、うん。元気出せよ楓」

「一夏わん・・・」

軽く落ち込んでいると、一夏さんがポンッと肩を叩いて慰めてくれた。

「俺達これから剣道場の方に行くんだけど、一緒に行くか?」

「あー・・・でも私、先生に呼ばれてまして。その前に篠姉さんとお話したかったのに・・・」

「そ、そつか・・・ま、まあ、たぶん篠も照れてるだから、すぐ話せるようになるつて、な?」

「はー・・・」

照れてる・・・照れてるのかなあ・・・?  
まあ、もう少し頑張つてみよつと思ひ。  
それに・・・今の、たぶん・・・。

第3アリーナ、来週の月曜日には一夏とオルコットが対戦することになる場所だ。

とは言え今日は、別の目的で「」を使用せてもいい。

その目的とは、篠ノ之楓の実技試験だ。

本来ならあり得ない処置だが、政府の意向で許可が下りた。おそらく、「篠ノ之束の妹」を掌中に収める好機だと思っているのだろう。

篠と楓、あの双子を入学させて何を企んでいるのかは知らんが・・・。

だが下手な手出しができないことも、わかっている。

「束が黙っているはずも無いからな・・・」

「・・・? 何か言いましたか?」

「ああ、いや、何でも無い」

・・・アレの姉、篠ノ之篠がIIS学園に入ったのは、他に束が納得できる場所が無かつたからだ。  
政府や委員会による度重なる詰問と転居、それによつてアレが受けた精神的な苦痛は相当な物だつたろう。  
そしてあるルートからそれを知つた束は・・・。

篠ノ之篠の獲得に關係しようとした企業・組織を、1日で全て壊滅させた。

それも一滴の血も流さず、死者も出さず……ただ、物理的に壊滅させた。

その方法は、誰にもわからない。

それで失われたデータと機材は、金額にすると兆を軽く超える。もちろん、ドル換算でな。

・・・私がいるIS学園だけが、確保できてしまも安全な場所だつた。

「・・・山田先生、準備は？」  
「あ、大丈夫です」

アリーナの中央に、1機のISがいる。

それに乗っているのは山田先生で、彼女は元々入試の教官だつた。加えて言えば日本の代表候補生だつたわけだが・・・それは良いな。

乗っている機体は『ラファール・リヴァイブ』・・・フランス製のISだ。

ネイビーカラーをした4枚の多方向加速推進翼が特徴的で、量産型ISの中では世界第3位のシェアを誇る機体、操縦のしやすさと汎用性の高さが売りの第2世代IS。

「専用機が相手だと、ちょっとキツいかもですけどね

「冗談を、山田先生なら専用機持ちのガキに負けはしませんよ」

実際、山田先生は強い。

私だって油断すれば負ける・・・まあ、ここ数年はエスに乗つていい私が言うのも、おこがましいが。

その山田先生がこれから模擬戦・・・試験をするのは、篠ノ之楓とその専用機。

スペックや機体特性などは束の送りつけたデータで見ているし、口アも束所有の登録済の物。

書類申請上は、「試験機」として篠ノ之楓に「貸与」と書いた形になつていて。

国籍をどこにするか、一夏の専用機と合わせて国際間で話し合われているが・・・。

・・・下手なことをすると束に制裁されかねないから、話し合いは進んでいないのが実情だが。

「お待たせしましたつ」

「遅い！ 5分前行動が基本だと教えなかつたか！」

「す、すみません！..」

指定した時間の少し前に、受験者・・・つまり、篠ノ之楓がやつて來た。

そのまま私達の前に来て、背筋を伸ばして立つ。

心無し、緊張しているようにも見える。

・・・当たり前だが、2人の姉のどちらとも違う反応だな。

「これよつ試験を行つ。基本的にはエリを動かせねば良いが……」  
一応、こちらの山田先生と模擬戦をして貰つ

「よろしくお願ひしますね」

「は、はいっ、お願ひします!」

物凄い勢いで頭を下げる……その後、山田先生とペロペロ合つて止まらなくなつたが。

まあ……とにかく、見せて貰おうか。

「では、エリを起動しろ……お前の姉には許可を取つてある、安心してやると良い」

「……はい」

私の言葉に、篠ノ之楓は左手の中指に嵌めていた黒い指輪を撫でた。それが、待機状態らしい。

専用機として「最適化」したエリは、量子化して形態を変える。基本はアクセサリーの形になる……ああ言ひ、指輪とかにな。

「……おいで、『黒竜』」

小さな眩き、同時に操縦者の身体が光の粒子に包まれる。

現れるのは、インフィード・ストラトス……。それは……。

S-side 篠ノ之 束たばね

んー・・・騒だなあ、楓ちゃんもいなくなっちゃったしなー。引っ越しもとりあえず終わったし、篠ちゃんや楓ちゃんやこいつくんにちょっかい出しあうな所も全部潰しちゃったしなー。

ちーちゃんが怒るから、死亡者ゼロ。え、どうせったかって……。あ、覚えて無い。いやーじちゃん、どーでも。

「楓ちゃんは今頃、とっくのとっくにあたってひたすら、いいなあ、篠ちゃんとこいつにこまかに話しかけてるんだうなー

篠ちゃんはお姉ちゃんに冷たいって言つたが、嫌つてるからね。何せ、電話もかかつてきただことも無いし、かけても無視だしね。

その時、束さんの携帯電話から「ジジドファ ザーのテーマが鳴り響く。」

「、」の着信音は・・・ちーちゃん！

束さんはもつ、それはそれは俊敏に携帯電話を取ったね！

「もすもす終口<sup>すなおひ</sup>ー、束さんだよーんつー！」

そして、出た瞬間に切られた、ぷちっと。

あーん、待つて待つて、ちーちゃん待つて！

そう念じたら、再びゴシ ファーザーのテーマ、ちーちゃん愛して

るう

「やふー、」の世一の天才、束・・・いやいや、切らないで切らな  
いで・・・」

その後、ちーちゃんに5分くらい怒られた。

うふふ、ちーちゃんだけだよ、私を怒れるの。

他の人なら、明日には一文無しになつてるんだから。

「それでそれで、何かなちーちゃん・・・え？ 何だアレはつて、何  
の話？」

はあ、はあはあ～、なるほど、楓ちゃんのID見たんだ？  
ああ、うん、まあ、アレは確かに半分くらい私が作ったんだけどね。  
基本設計は楓ちゃんだよ、私はお姉ちゃんだから、ちょちょ～っと

手伝つただけで。

「アレはねえ、そうだねえ、何と言つか……うん、他のHISとは  
コンセプトがね、違うんだよ」

何と言つても、後から生まれる機とセットのつもつていろいろ  
たからさあ。

アレ単体だと、いろいろと変なことになるんだよね、うん。  
まあ、天才の束さんが、弟子で助手で可愛い末の妹な楓ちゃんのた  
めに作つたからね、他のとは千味くらう違つよね。

「ああ、『白式』？ モチロン大丈夫……」

クルツ、と座つてた椅子を反対側に回して、「それ」を見上げる。  
そこには・・・「白」がある。

束さんがいつくんのために丹精込めて作つてあげたEISが……。

「来週の月曜日には、ちやんと届けてあげるからね、ちーちゃん

」

束さんにお願いができるのは、この世で4人だけなんだかい。  
うーん、サービス精神旺盛だね、流石は天才の束さんだねつ。



## 第2話：「クラス代表決定戦・前編」（後書き）

篠ノ之 楓：

どうもです、どうにか学生生活も軌道に乗つて来た・・・と思つ、楓です。

そもそも学生生活って何をすれば良いのかさっぱりだけど、とりあえずお友達を作る所から初めて見ました。

今日は、この世界でのISの運用に関する国際的な取り決めなどについて説明させて貰いますね。束お姉ちゃんはバラまくばかりで後は放置だから・・・。

ある事件を境に、ISは現行兵器を上回る機動兵器としてデビュー、各国はこの新たな脅威の扱いについて話し合うことになります。まあ、束お姉ちゃんが日本人だったんで、基本的に世界中から日本が叩かれていたようです。

長いようで短い話し合いの後に締結されたのが「アラスカ条約」。

アラスカ条約：

正式名称は「IS運用協定」、通称「IS条約」。467のISコアを主要国に「平等に」分配することや技術・情報開示、関連製品取引の規制などが取り決められています。軍事転用の「禁止」も盛り込まれますけど、誰も守つません。IS学園の設置についてもここで明記されています。各国のIS保有数や動向を監視する機関としては国際IS委員会がありますけど、これも結局は主要国のクラブです。

モンド・グロッソ：

主要21カ国・地域が参加するISの対戦の世界大会。各部門の優

勝者は「ヴァルキリー」、総合優勝者は「ブリュンヒルデ」と呼ばれて称えられます。千冬姉様はどちらも持っています、凄いですね！」。

篠ノ之 楓：

・・・とまあ、こんな感じです。

その他、いろいろ細かい規定とかありますけど・・・ほとんどあって無いような規定ですし、そもそもEHSはブラックボックスが大きいので。

・・・もしかしたら、束お姉ちゃんが面倒がって適当に組んだシステムかもしれないし。

篠ノ之 束：

むふ？ そんなこといつの間にか、いつだ〜

篠ノ之 楓：

あばばば・・・

### 第3話：「クラス代表決定戦・後編」（前書き）

もしかしたら、楓ＶＳ山田先生な展開を期待しておられた方。  
残念、まだ引っ張ります（申し訳ありません）。  
では、どうぞ。

### 第3話：「クラス代表決定戦・後編」

第3話：「クラス代表決定戦・後編」

Side 織斑 一夏

入学式のあつた次の週の、月曜日。  
つまりは、俺とセシリアの対戦の日だ。  
ただし、大きな問題が2つある。

「なあ、第……ISのことを教えてくれると誓つのはビリになつた  
んだ？」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

1つは、笄が俺に剣道の稽古しかしてくれなかつたことだ。

いや、もちろんありがたい・・・試合の感覚を取り戻すのも大事だ  
つてのはわかる。

何しろ中学時代は家計を助けようと それでも生活費の9割は  
千冬姉が出してたけど 3年間、アルバイト生活で剣道なんて  
して無かつたからな。

だけど問題はこの1週間、剣道しかしなかつたことだ。

個人的に教科書を読んだり山田先生のレクチャーを受けたりはした  
物の、それ以外はさっぱり。

楓を頼つてみたこともあるが、「筹姉さんに教えて貰つ約束をしたでしょ」と突っぱねられた。

おかげで毎日毎日放課後3時間、みつちり筹と剣道の日々だった。

「し、仕方が無いだらう、お前のISだつてまだ来てないんだから」「いや、それでも基礎とか知識とか、いろいろあつただろ……？」

「そもそも一つ、当日だと叫つのに俺のISがまだ来ていない。そう、まだ来ていない。」

「大事なことだから、2回言つた。」

一応、千冬姉に呼ばれた通り、第3アリーナのAピットに来たんだけど……。

「お、織斑君織斑君織斑君ッ！」

不意に、3回も呼ばれた。

顔を上げれば、転びそうな足取りでこちらに駆けて来る山田先生。千冬姉は歩いてるのに、どうして走つてゐる山田先生と並んでこっちに来れるんだらう。

「山田先生……と、千冬ねつて、痛あつ！？」

「学校では織斑先生と呼べと叫つてゐる。いい加減に学習しり、さもなければ死ね」

出席簿で俺を殴るのは、もちろん千冬姉。

実の姉からの温かい言葉に、俺は涙が出そうだった。

俺の周りの女性は、どうしてこんな・・・それとも、女尊男卑の時代の影響か？

いや、時代のせいにするのは良く無いな、うん。

「そ、それでですね、来ました、織斑君の専用IS-1・ピットに搬入してあります！」

「織斑、さつやと準備をしろ・・・アリーナの使用時間は限られている。ぶつけ本番でモノにしろ」

「男子たる者、この程度の障害は軽く乗り越えて見せる、一夏」

山田先生、千冬姉、篝がそれぞれ俺を激励してくれる・・・激励、だよな？

でも俺、何をしたら良いのかさっぱりわからないんだが。

ブシュッ・・・空気の抜けるような音と共に、ピットへ出る扉が開く。

山田先生に背中を押されて、たらを踏みながら中へ。

そこにいたのは、『白い騎士』だった。

真っ白な、純白の、飾り気のない無骨な鎧。

それが第一印象、装甲の一部が開いていなければ、乗り物だとは気付かなかつたかもしぬ。

真っ白なそれは、まるで俺を待つてゐるかのように膝をついていた。これが、俺の。

「・・・これが？」

「はい、織斑君の専用機・・・『白式』ですー。」

白い式と書いて、『白式』。

どうしてだらう・・・このIISがまるで、ずっと俺を待つてたみたいに感じるのは。

これが、俺の・・・と、1歩近付いたその時、誰かが『白式』の陰から出て来た。

それは・・・。

「どうも、篠姉さん、一夏さん

「・・・楓ー?」

あ、篠とハモつた。

そこにいたのは、篠と同じ顔の女子だった。

髪は篠と違つて短く、表情も厳しさよりも緩さが目立つ。

ミニのスカートとオーバーハイの靴下の間の肌色が、眩しい。

・・・って言つた、気のせいで無ければ、篠が楓の名前を呼ぶのを初めて聞いた気がする。

そのせいなのかどうなのか、楓は篠を見ると嬉しそうにこつこつと微笑んだ。

「背中を預けるように、ああそつだ、座る感じで良い。後は勝手にシステムが最適化してくれる」

「あ、ああ・・・」

千冬姉様の言葉に従つて、一夏さんが『白式』に乗る。

操縦者と『I』の「意識」が繋がる瞬間で、人によつては違和感を感じることもあるけれど。

どうやら、一夏さんは大丈夫みたい。

私にはわからないけど、一夏さんは今『白式』から膨大な情報を得ているはず。

操縦方法、性能、特製、装備、活動時間、エネルギー残量、出力限界、そして「敵」の情報。

『IS』は操縦者が必要とするあらゆることを教えてくれる、相棒として。

「『IS』のハイパーセンサーは、問題無く動いているようだな。一夏、気分は悪くないか？」

「・・・大丈夫、千冬姉、行ける」

「・・・そつか」

千冬姉様と一夏さんが、おそらくは身内にしかわからないだらう視線の交わし方をする。

そう言つて、素敵だと思つ。

私が篠姉さんを見ても……あ、また逸らされた。

割とショック……。

「ところで、楓はさつきから何をしてるんだ……？」

「見てわからないのか、馬鹿者。お前のために『初期化』<sup>フォーマット</sup>と『最適化』<sup>フィット</sup><sub>イング</sub>をしてるんだよ……篠ノ之妹、間に合いそうか？」

「時間が足りないです」

千冬姉様の声には、きつぱりと答える。

答えないで後で何をされるか……まあ、出席簿の一撃だけだと思うけど。

そんな私の前には、空間投影式のディスプレイとキーボード、それぞれ6枚と2枚。

キーボードの上で指先を躍らせながら行つのは、『白式』<sup>びやくしき</sup><sub>フォーマット</sub>の初期化作業。

このIFSを本当の意味で一夏さん専用にするためには、まずコアから前の機体の情報を消して、さうに一夏さんの情報を入力しなければならない。

1秒ごとに、ソフトウェアとハードウェアが一夏さん専用のそれに微修正されていく。

普通、何時間もかけて少しずつやる作業なのだけれど……。

「え、ええと・・・ありがとう? でも何で楓が?」

「コイツは整備科志望だからな・・・本当は専用機には整備チームがつくるが、お前にはまだ無い。手伝って貰えるだけありがたいと思えよ」

「な、なるほど」

・・・2つのキーボードを同時に扱つて、どうにか『初期化』を最

終段階まで進める。

同時に一夏さんの情報の入力を初めて『最適化』。

時間が無いから、いろいろな作業を一度に済ませないと・・・。

・・・ハイパーセンサー接続、最適化完了、操縦者視界良好、クリア。

機体制御システムオンライン、姿勢保持システム及び各部推進装置の偏向重力推進角錐度数をアトランダム設定して最適数値で、それ自動固定、加減速補助システム作動・・・P I C 関連システム問題無し。

登録武装・・・あれ? 一個だけか、じゃ良いや。

推進ユニット・コントロール・システム最適化、エネルギー・バイアス・オペレーティング・システム及びシールド・エネルギー制御システム更新・再構築・・・それぞれ30秒以内に再実行、仮想試験結果を繁荣しつつ数値変更・・・。

「・・・凄い・・・」

山田先生の声、でも私はそんなに凄く無い。

束お姉ちゃんなら、1分もあればこれくらいの作業は終わらせてる。でも私は搬入の時点から3分経つても、『初期化』しかできない。まだ半分も・・・。

「・・・篠ノ之妹、もう良い。後は一夏が試合中に何とかするだろう。できなければ負けるだけだ」

「ああ、サンキューな楓」

「・・・わかりました」

『白式』からコードやケーブルを抜いて、接続を解除する。後は『白式』が自動で『最適化』フィットティングする、でも試合終了まで間に合つかどうかはわからない。

・・・悔しい、凄く中途半端な仕事をした気分。

でも一夏さんは、凄く落ち着いた笑顔でお礼を言ってくれる。

それから、心配そうに一夏さんを見ていた篠姉さんの方を向いて・・

・。

「篇」

「な、なんだ?」

「・・・行つてくる」

「・・・ああ」

一夏さんの言葉に、篠姉さんが少しだけ微笑む。

・・・それに私が少しだけ驚いている間に、一夏さんはピットの会場側出口の方へISを進ませる。

重い音を響かせて、『白式』<sup>びやくじゆ</sup>が歩く。

・・・良かつた、ちゃんと動く。

でもあのシステム構築様式、確か東お姉ちゃんの・・・。

「・・・勝つてこい」

祈るような篠姉さんの声に、一夏さんは篠姉さんを見ずに手を上げるだけで応える。

おお、良く分からぬけど、通じ合つてゐる感がする。  
そして、一夏さんはゲートの外へと・・・。

Side セシリ亞・オルコット

・・・私の母は、厳しくて強い人でしたわ。  
女尊男卑の風潮が世に広まるよりも前から、いくつもの会社を経営して成功した人。  
家柄でも能力でも母に劣っていた父は、いつも母の顔色を窺つていた・・・。

そう、だから「男なんて」そんなもの。

そんな2人の間の愛情が続くはずも無く、母はいつしか父を避けるようになつていきました。

でもあの日・・・3年前、死者100人を数えた越境鉄道事故で2人が亡くなつた時。

その日だけは、どうしてか2人一緒に・・・でもその理由を考える間もありませんでした。

私は両親の財産を狙う下種共から家を、両親の遺したものを見守るため、勉強の日々を過ごし。

そして・・・。

「・・・『ブルー・ティアーズ』」

小さな声で囁くのは、私の身体を覆う青の鎧の名前。

鮮やかな青、背中には特徴的なフイン・アーマーを備えた蒼穹の騎士。<sup>エス</sup><sup>アイ</sup>

これが私の、一つの結果ですわ。

IS適正テストで世界でも有数のランク・・・「A+」を出して。政府から国籍保持のための好条件が出されて、家を守るために受け入れました。

そして第3世代試験機のこのISの専属操縦者になり、稼働データと戦闘実績を得るために日本へ。だから彼と戦うのは、そのためでもあります。

「個人的に気に入らないと言つ気持ちも、まあ、ありますけど……」

何しろ、男だと言つだけで専用機まで与えられるのですから。  
私が数年かけて それでも短い方だと言つのに 手に入れ  
たものを、彼は数日で。

男だと言つ、ただそれだけの理由で。

・・・叩き潰して差し上げますわ。

私がそんなことを考えた時、ようやく彼がピット・ゲートから姿を  
現しましたわ。

私の目の前に『ディスプレイが浮かび、『ブルー・ティアーズ』が彼  
の・・・織斑一夏のIISの情報を教えてくれます。  
ありがとう、『ブルー・ティアーズ』・・・でも大丈夫、私と貴女  
が負けるはずがありませんわ。

「最後のチャンスを差し上げますわ」

「・・・チャンスって?」

「私と『ブルー・ティアーズ』が、一方的な勝利を得るのは自明の  
理。今、ここで謝罪すると言つのなら、許してあげないこともなく  
つてよ?」

〈射撃コマンドを展開、セーフティロック解除〉

頭の中に響くのは『ブルー・ティアーズ』の声、同時に左目の部分にターゲット・ロック・システムが展開、右腕部分に展開される主力レーザーライフル「スター・ライトmk-II」にエネルギーが充填されます。

そして同時に、試合開始の鐘が鳴り響きます。

彼も気付いたのでしょう、身構える。

あの白いISの性能自体は、それなりのようですね。  
でも・・・。

「・・・そう言つのは、チャンスとは言わないな  
「あら、そう？ 残念ですわ、それなら・・・」

ターゲット・ロック  
< 標的確認、射撃開始まで3秒、2、1・・・>

・・・でも本人の能力は、どうかしらね！

「・・・お別れですわね！！」

トリガーを引いて、甲高い独特の射撃音が響く。  
同時に、私の『ブルー・ティアーズ』から最初の射撃が放たれました。

「うおおおお！」

いきなり撃つてきやがった！

いや、もう試合開始の鐘は鳴ってるんだから、卑怯でも何でもない。ただ、俺がボンヤリとしてただけだ。

一応、ギリギリでかわしたけど・・・俺の手柄でも何でも無く、『白式』のオートガードが俺を守ってくれただけだ。オートガードだから、俺の意思とは関係無く『白式』が動いただけ。つまり、俺が『白式』の反応についてこれで無い・・・！と言うか、動かし方だつて碌にわからん！

＜ダメージ46、シールドエネルギー残量521＞

頭の中に『白式』の声が響く、ちなみに今やつてるみたいなIS同士の戦いは、「ISバトル」と言つスポーツとして世間に認知されてる。

まあ、学園では普通に模擬戦つて言つんだけど。

「ISバトル」と言つてのスポーツは、相手のシールドエネルギー・

・・まあ、HPみたいな物をゼロにすれば勝ちだ。

エネルギーがゼロになると实体（本体）にダメージを通せる、それで勝ちってわけだ。

後、ISには「絶対防御」って言<sup>ヒックトボイント</sup>うシステムがあつて、最低限操縦者が死なないようになつてゐる。

・・死ぬとか、縁起でも無いけどな。

「さあ、踊りなさい！ 私、セシリア・オルコットと『ブルー・ティアーズ』の奏でる円舞曲で…！」

声と同時に、セシリアの射撃が雨のよつに降り注いでくる。いくらオートガードって言つても、全部を凌げるわけじゃない。しかも相手の射撃が的確なもんだから、ガンガン当たる…直撃だ、しかも連続。と言ひか、避け方がわからん。

おかげで、『白式<sup>びやくしき</sup>』も警戒音を鳴<sup>アラート</sup>らしつぱなしだ。

上へ避けても左に飛んでも…200メートルもあるアリーナなのに、どこへ飛んでもセシリアの射撃が俺を襲つてくる。

・・・アイツ、凄いな。

「・・・って、感心ばかりしてらんねえ…何か、武器は

丸腰じや無理だ、『白式<sup>びやくしき</sup>』に武器の一覧を出すよつに頼む。

・・・つて、1個だけかよ！？

ええい・・・ままよ！

右手を掲げて、量子化していた武器を実体化させる。束さんが基礎理論を構築したつて言ひこの量子化・物質化のシステム・・・いつたいどう言つ理屈なのか、さっぱりだ。だけどそのシステムが、俺に武器を・・・1本の「刀」を貰えてくれる。

片刃の長刀・・・刃渡り1・6メートル。

「中距離射撃型の私達に、近距離格闘装備で挑もうだなんて・・・笑止ですわね！」

そして、セシリアの射撃。

機体を無理矢理捻つて、かわす・・・でも彼我の距離は絶望的、2.7メートル。

俺の攻撃射程にセシリアを捉えるにはその距離を、しかも弾幕の中を潜らなきやいけない。

今にして思えば最初の一撃は挑発でも奇襲でも無く、距離を広げるための物だったのかもしねれない。

「・・・やつてやるや」

千冬姉や筈、それに『初期化』してくれた楓、機体搬入の手続きをしてくれた山田先生に・・・無様な格好は、晒せないよな。だから、やつてやるや・・・この『白式』で！

一夏が、戦っている。

初めてのISバトルで代表候補生との戦い、予想通りと言つか、苦戦だった。

オルコットの射程距離の長さに、近接用の装備しか持たない一夏は翻弄されている。

特に、オルコットの機体から放たれている4機のビットのような物が厄介だ。

青いISの背中についていたフインが分離して、それぞれ独立したビットになっている。

それぞれが独立軌道で動く銃器のような物で、先端から特殊なレーザーを放つ。

「何だ、アレは……？」

「イギリスの第3世代装備『ブルー・ティアーズ』。オルコットさんのISと同じ名前なのは、あの兵器を積んだ実戦投入1号機だから、だとか」

私の呟きに答えたのは、楓だ。

私は千冬さん達と一緒に、Aピットからリアルタイムで一夏の戦い

を観戦している。

目の前の大きなモニターには、第3アリーナで行われている試合が映されている。

私の立ち位置は千冬さんと山田先生のの後ろで、そしてその私の左隣に楓がいる。

楓・・・数年ぶりに会った私の双子の妹。

楓は空間投影式のディスプレイとキーボードを1枚ずつ展開させたまま、一夏の試合をデータ面で分析しているようだった。その姿は・・・嫌でも、あの人を思わせる。

「見た限りにおいて『ブルー・ティアーズ』ややこしいので以下ビット は相手の死角からの全方位オールレンジ攻撃が可能、まだ稼働実験段階の「BT兵器」と呼ばれる兵装だと思つ。展開前にはスラスターとして使用していたようなので、ある程度の汎用性も備えているみたいだね」

楓の声が続く間にも、画面の中の一夏は追い詰められている。

上下左右に展開したビットがビームを放ち、一夏をオルコットのライフルの照準地点に追い込む。

その繰り返しだ、気の休まる暇も無い。

一夏はIS稼働時間20分とは思えない身のこなしで、ビットの攻撃を回避、防御し続けている。

だが、このままでは・・・。

「・・・一方で『白糸』は現在、近接用のブレードのみを装備。あれはまさに敵を殴りつけないと効果の無いタイプで・・・懷に飛び込めない限り一夏さんに勝機は「つ・・・一夏が負けるわけが無いだろつー・ー」

思わず、怒鳴った。

直後に後悔する、何をやっているんだ、私は・・・。

「い・・・」めんなさい、姉さん

「・・・こや」

頭を振つて、苛立たしい気持ちを落ちつけようと親指の爪を噛む。この一週間、楓のことを避けていたから・・・これが、数年ぶりの会話と言つことになる。

数年ぶりの会話が、これが。

だが、他に何を喋れば良いのかなんてわからない。

私と違つて、あの人と一緒にいた楓。

・・・憎んでいるわけでも、嫉んでいるわけでも無い。

だけど・・・何を言えば良いのか、わからない。

「一夏・・・・・」

画面の中では、一夏がオルコットの弾幕を潜り抜けて、よつやく接触した所だった。

ぎゅつ・・・口元に持つて行つていた手を、無意識に握り込む。

一夏・・・。

Side 織斑 千冬

後ろで小娘共が騒いでいるようだが、そんなことは知らん。姉妹の問題に口を出す程、私はお節介焼きじゃない。

「はああ・・・凄いですね、織斑君。とてもE-Sを動かすのが2回目とは思えません」

モニター前の椅子に座っている山田先生が、感嘆したように呟く。確かに、画面の中の一夏は素人とは思えない程の健闘ぶりを示している。

初陣、しかも相手は代表候補生だと言うのに。

画面の中の一夏が、オルコットのビットの1機を叩き斬った。

それは、オルコットのビットの弱点を看破したが故の結果だ。あのビットは、オルコットの射撃と同時には動かせない。

つまり自動じゃない・・・それを逆手にとつて、一夏はわざと隙を作つて、ビットを誘導、迎撃する。

そつ言つてゐる間に、2機田、3機田と墮としていく・・・。

「・・・馬鹿者め、浮かれているな」

「え・・・どうしてわかるんですか?」

「さつきから左手を閉じたり開いたりしてゐるだらう・・・昔からのクセだ」

「へええ・・・流石はお姉さんですね、そんなあいたたたたつ!」

?

私をからかおうとした山田先生にヘッドロックをかけつづけ、私は画面を注視する。

そこには、4機田・・・「最後の」ビットを墮とそうとしている一夏が映つてゐる。

とは言え、ダメージは深刻・・・にも関わらず、その機動性は上昇しているように見える。

普通、ダメージを受けければ機動性は落ちるはずだが・・・。

「・・・直前の『最適化』フィットティング作業が、ここに来て活きてきたか」

あの機体は元々、倉持技研と言つ日本のおIS企業が開発していたが・

・・色々な理由で、放棄された。

そしてそれを束が引き取つて、完成させた。

・・・前代未聞の第4世代ISとして。

各国が第3世代の開発に躍起になつてゐる所に第4世代のITS、公表などできない。

アレの整備担当として篠ノ之妹を呼んだのは、他にできる人間がいなかつたからだ。

加えて言えば、『白式』のコアに接続できるのが私と一夏、篠ノ之姉・・・そして篠ノ之妹だけだった。

もちろん、開発者である束は例外とした場合だが。

「・・・束の、弟子か」

先の束との電話で、篠ノ之妹のことを少しだが聞いた。

最も、束の言つていることは8割は意味不明だが・・・。

「・・・何だ！？」

篠ノ之姉の声に、思考を現実に戻す。

画面の中で、一夏が4機目のビットを墮とした時、「それ」は起つた。

・・・機体に救われるか、馬鹿者が。

↖『最適化』<sup>ファイツティイニング</sup> 終了、確認ボタンを押してください ↵

な、何だ・・・?

セシリ亞の最後のビットを刀で斬り落とした後、いきなり『白式』<sup>びやくしき</sup>が話しかけて来た。

目の前のディスプレイに浮かんだ「確認」を押すと、膨大なデータが意識に直接流れ込んでくる。

刹那、俺のISHが量子化して・・・直後、再び実体化する。

中世の無骨な鎧のようだったそれは、形がかなり変わっていた。より曲線的に、よりシャープに・・・そして、直感的に理解する。これでこのISHは、「俺専用」になつたと。

「一次移行・・・じゃあ、今までは初期設定だつたつて言つの!・?」

「ふあー・・・何だつて?」

セシリ亞が驚いているみたいだけど、俺には細かいことはわからない。

右手の刀を見ると、それもまた形状が変わっていた。

「・・・『雪片式型』<sup>ゆきひら・にがた</sup>?」

そこには昔、千冬姉さんが現役だった頃の動画で見た、あの刀があ

つた。

姉さんの、刀。

刀に形成した・・・形名。

刀と言うより反りの深い「太刀」、鎬に刻まれた溝からは工業的な粒子が溢れている。

・・・ああ、そうだよな。

俺は本当に、最高の姉さんを持ったよ。

元「世界最強」・・・誰よりも綺麗で強い、世界一の姉さんだ。だから千冬姉が誇れるとまでは言わなくても・・・恥じることの無い、そんな弟でいたいと願う。

「だから」

チャキッ・・・新しくなった刀・・・いや、太刀を両手で持つて、下段に構える。

「・・・『<sup>びやくしき</sup>白式』、距離は?」

<16メートルです>

・・・遠いな、だけビットは全部落とした。後はライフルをかわしながら・・・飛び込む!・

「・・・ぜあああああああつー！」

「ぐつ・・・面倒ですわー！」

距離を開こうとするセシリ亞、縮めようとする俺。  
これまでの動きが嘘のように、『白式』<sup>びやくしき</sup>を思い通りに動かせる。  
追いかけっこは唐突に終わり、ライフルの銃口を蹴りつけて外し、  
太刀を大上段から振り・・・。

「お生憎様」

次の瞬間、セシリ亞の機体のスカート部分が開く。  
開いたそこから現れたのは、2つの突起物・・・つまり。

「『ブルー・ティアーズ』は・・・6機ありますよ！」

放たれるのはビームじゃない、2発のミサイル

！

「・・・ー！」

だけど、見える。

ミサイルの軌道、どこを狙うのか・・・頭が判断するのと同時に、  
機体が動く。

思つた通りに、斜めにホール移動。

1発目、右肩の装甲を掠めつつ回避。

2発目・・・斬る！

ガニン・・・両手に鈍い重みを感じると同時に、爆発の衝撃が俺を襲う。

ダメージ66、シールドエネルギー残量

『白式』  
ひやへしき  
の声も無視して、爆煙の中を直進する。

黒煙を抜けた際には、焦りの色を浮かべたセシリ亞の顔があつた。

下段から上段へ、逆袈裟払い。

『白式』から太刀にエネルギーが供給されていくのを感じる、太刀が熱い。

『雪片』  
ゆきびら  
の刀身が輝き、俺はその輝きに導かれるよつて

卷之三

そして

○

「大馬鹿者め、武器の特性もわからないくせに無理に使うからそつなるんだ」

「大馬鹿者つて・・・馬鹿者から嫌な方向にランクアップしないでくれよ・・・」

「何か文句があるのか?」

「・・・無いです」

試合の後、一夏さんは千冬姉様にこつてりと絞られていた。自分の武器を中途半端に使いやがつて・・・と言う内容にも聞こえरけれど、たぶん照れ隠し。

自分の武器を弟が継いでくれたことが、実は物凄く嬉し・・・。

「・・・篠ノ之妹?」

「な、何でも無いデス!」

一夏さんを絞つている千冬姉様の標的が私に移りかけたので、慌てて思考を止める。

と言つた何、相手の思考が読めるの・・・?

いや、それ以前に篠ノ之妹つて。

東お姉ちゃんから見れば、篠ノ之妹つて2人いるよ?

まあ、良いや・・・今はとりあえず、『白式』の方に興味あるし。ブウンツ・・・と私の田の前に上下4枚、合計8枚の空中投影型『ディスプレイ』が浮かぶ。

そこには、一夏さんの専用『IS』『白式』の『最適化』後の『データ』が映しだされる。

「うーん、やつぱりちゃんとパーソナライズした方が・・・」

千冬姉様に聞いた話だと、これを作ったのは束お姉ちゃん。どうりで『初期化』しやすいと思つた、お姉ちゃんは私がやりやすいようにシステムを組んでくれてたんだね・・・えへ、何か嬉しいな。

束お姉ちゃんの作った『IS』を、私が整備。  
うん、美しい。

これが篠姉さんの専用機だつたりした日には、きっともっと楽しいよね。

束お姉ちゃんが作つて、私が調整して、篠姉さんが動かす。  
・・・理想だね。

「篠ノ之妹、そろそろ良いか」  
「あ、はい」

千冬姉様に言われて、『白式』との接続を切る。

それから一夏さんが『白式』を待機状態にして、白いガントレット

の形になつて、一夏さんは手首に納まる。

待機状態になつた IIS は、操縦者が望めばその場ですぐに展開できる。

でもここは IIS 学園、当然のように電話帳並の規則の本がある。一夏さんは、山田先生からそれを青い顔で受け取つていた。

「・・・何にしても、今日はこれでおしまいだ。帰つて休め」

締めの言葉は、やつぱり織斑先生。

と詰つわけで、今日は一件落着・・・。

「・・・あ

ふと視線に気が付く、それは篠姉さんの物だった。

いつもと同じ、鋭い視線。

何と言づかこの1週間、上手く話せなかつたから・・・ちよつと緊張。

「・・・IIS の」  
「う、うん・・・」  
「IIS の整備、姉さんに習つたのか・・・?」  
「あ、うん」  
「・・・・・そうか」

それだけ。

それだけ言って、篠姉さんは一夏さんを連れてピットから出て行った。

・・・ほんの、一言だけ。

たった数秒間だけだけど・・・篠姉さんと、お話ができた。

それが嬉しくて、私はその場で歓声を上げた。

・・・直後、千冬姉様にはたかれた。

### Side 篠ノ之 篠

・・・この感情は、何だろうな。

楓は東姉さんにIISのことを教えてもらって、それで一夏のIISの  
『初期化』をした。

羨ましい・・・の、だらうか、私は。

まさか、そんなはずは無い。

ただ、私は・・・。

「・・・なあ、篠」  
「・・・」  
「・・・」

「おーい・・・無視すんなよ、篠むらん」

一夏の声に、ふと立ち止まる。

振り向くと、何だかバツの悪そつたな顔をした一夏がいた。

「・・・勝てなかつたな」

「ぐあ」

私の言葉に軽く呻いて、そしてかなり落ち込んだよつた表情を見せる一夏。

その姿を見ていると、わたくれ立つた心が少しだけ安らかになるのを感じた。

我ながらどうかとも思つが、一夏と一緒にいると安らぐ。

・・・ど、同門の人間が傍にいると落ち着くと言ひ、それだけの意味だ。

それ以上の意味は無い、無いつたら無いからなー

心の中で自己完結した後、再び歩き始める。

当然、一夏もついてくる・・・。

・・・と、当然と言ひのば、行く場所が同じだからと言ひの意味で、共にいるのが当然と言ひの意味では無いぞ。

「い、一夏」

「ん、何だ?」

「く、悔しかつたか・・・? 勝てなくて」

「そりや・・・まあ」

「じこが沈んだような一夏の声に、私は少しだけ目を閉じる。思い出るのは、幼い頃の剣道場。

中学時代は剣を握っていなかつたと書つ一夏は、あの頃とは違つて物凄く弱くなつた。

この一週間、剣を合わせて・・・私から一本も取れなかつた程に。

だけど、根本の部分は変わつていない。

今の言葉でそれがわかつて、とても嬉しかつた。

・・・楓と話せ話せ言つのは、正直アレだが。

「・・・なら、明日からはHSの訓練もいれないとな  
「あ、教えてくれるのか?」  
「そう言つただろう」

いつかの会話を繰り返す。

「い、一夏が私にじうじうも教えてほしこと書つのならな、仕方無い  
「ああ、そうだな、是非頼むよ  
「・・・う、うむ。では明日からは必ず放課後を空けておくれのだが、  
良いな?」  
「うむ」

・・・明日から、放課後はずつと一夏と2人きり。  
い、いや、単にHSの訓練をするだけだ、うん、それ以上の他意は  
無いぞ！

私は単純に、不出来な同門にいろいろと教えてやうつと言つだけだ。  
・・・それだけだからな！

「か、勘違いするなよ、一夏！」  
「え、お、おうつ！」

・・・まあ。

とにかく今日は、頑張ったな。

・・・一夏・・・。

Side セシリア・オルゴット

シャワールームの中で熱いお湯に打たれながら、私は今日の試合について反芻しておりました。

今日の試合・・・織斑一夏とそのHSとの試合を。  
私が・・・私と『ブルー・ティアーズ』が・・・。  
「・・・一撃を、喰らうだなんて・・・」

今日専用機を持つたばかりの男に、代表候補生であるこの私が。  
最後の一撃は、いつたい何ですの・・・？

私の機体のバリアを無効化して、直接ダメージを与えるなんて。  
そこで相手のエネルギーが切れましたから、それ以上の追撃はありませんでしたけど。

とは言え、どうして彼の機体が直後にエネルギー切れを起こしたのかもわかりませんわ。

私に一撃を与えた時には、まだ残っていたはずだけれど・・・。  
・・・そのおかげで機体のダメージが最小限に留められたのですから、不幸中の幸いなのでしょうけど。

でも、もしエネルギー切れを起こしていなかつたら・・・。

「・・・結果的には、私の勝利・・・とは言え・・・」

でも昨日今日にEISを動かした素人、まともな訓練も受けていない相手。

それに、一撃を許した。

直後に彼のEISがエネルギー切れを起こさなければ、ゼロ距離で撃ち落としていたとは言え。

ビットも破壊されて、無様にも程がありますわ。

・・・何なんですか、あの男！

「・・・織斑、一夏」

彼の・・・織斑一夏のことを、思い出す。

最初から女である私に媚びようとせず、むしろ反発して見せた彼。母の顔色を窺つてばかりいた父とは、まったく違いましたわね・・・。

強く、迷いの無い、真っ直ぐな瞳。

最後の一撃の瞬間、視線を交わしたあの時。  
あの瞬間だけは、本物でしたわ。  
身体にはまだ、あの時に撃ち込まれた一撃の感触が残っています。  
そして、私が撃ち込んだ攻撃の感触も・・・。

「・・・織斑、一夏」

初めて会つた男・・・男だと言つのに、それでも。

私に、このセシリ亞・オルコシトに一撃を喰らわせた男・・・  
他の男とは違う、何かを感じるのはどうしてでしょう・・・?  
たかが、男の分際で。

きゅつ・・・蛇口を捻り、お湯を止める。

湯気で包まれるシャワールームの中、曇つた鏡を掌で大きく擦る。

そこに映るのは、見慣れたはずの自分の顔。

・・・もっと良く、知らないといけませんわね。

織斑一夏、私と『ブルー・ティアーズ』に一撃を『えた男の、こと

を。

Side 織斑 一夏

セシリアとの試合の翌日、クラスに来たらとんでも無いことになつていた。

具体的に言つと、何故か俺がクラス代表になつっていた。

・・・何でだよ、負けだつたじやん俺！

「では、1年1組のクラス代表は織斑 一夏君に決定です。あ、一繫  
がりで良い感じですよね」

嬉しそうにしないでください、山田先生。

クラスの女子達は「唯一の男子なんだから、持ち上げないと」とか  
「経験が積めて情報も売れる、一粒で一度美味しい」とか言つて  
けど・・・いやいやいや！

第一、あのセシリアが納得するわけが

。

「私、代表は辞退致しましたの」

・・・つて、本人が納得してゐるし！

それなら、まあ・・・つて、そうじやないだろ！

「おおっ、見事なノリツツコリですね、一夏さん」

「だね～、実に見事だと思つよ～」

いやいや楓、のほほん（布仏本音）さんと一緒になつて拍手するなよ。

波長が似てるのか何なのか知らないが、すっかり友達になつてているらしい。

篠もあれくらいうれしい社交的なら、もう少し人付き合つても上手くなるだろう。

「一夏？」

「と、とにかく、何で俺が代表なんだよ！？」

隣にいた篠が物凄く剣呑な雰囲気を放つたので、話題を戻す。

・・・と言つた、何で俺の考へることつてバレるんだ？

俺、わかりやすいのか・・・？

「勝負自体はああ言つ結果でしたが・・・初めてのバトルで代表候補生の私とあれだけ戦つたのですもの。むしろ私が退かないと面目が立ちませんわ。快く代表の座を受け取つてくださいまし」

その心遣い、今はいらないから。

・・・と言つた、セシリ亞の俺を見る目が観察しているような物に

見えるのは何でだ？

「HSの技術向上には場数を踏むのが一番・・・クラス代表ともなれば、バトルには事欠きませんもの」

「いや、そもそもしれんけども・・・」

「何でしたら、私が教えて差し上げても良くてよ？」

「必要無い、私が頼まれたからな、私が教える」

おおう、簞さん。

いきなり話に混ざつて来たかと思えば、何故か言葉に物凄い棘が。

「あら、そう。なら仕方ありませんわね・・・私は見れればそれで十分ですし」

そしてあっさりと引き下がるセシリア、最初の刺々しさはどこに行つたんだよ。

と言つたが、後半に何かブツブツ言つて無かつたか？

いや、まあ、良いけど。

「あ、ね、姉さん・・・」

その後、楓がおずおずと簞に近付いて来た。  
期待と不安が混ざつた表情で、ツツツと傍に寄つて行くその姿は、  
ちょっと可愛かった。

「ん、その……お、おは……おはよひ……」「  
・・・・・」「  
・・・・えと。あ・・・・」

対する篠はとと言うと、ふいと猫のようになに顔を背けて、自分の座席へと向かつて行った。  
おい、妹に対して何て態度だよ。  
そして楓は楓で、落ち込んだ猫のようになじゅんとしている。  
話相手を失ったセシリ亞も、「やれやれ」と言いたげに肩を竦めて自分の座席へ。

「うーん・・・」「  
「だ、大丈夫だつて楓、篠もさ・・・」「  
「・・・グッドモーニングの方が良かつたかな・・・?」

いや、そこじやないと思うわ。

楓は腕を組んで何やら考えながら、自分の座席に戻った。  
篠の反対側、廊下側の座席に。

・・・まあ、俺は実の所、あんまり篠と楓のことは心配しない。  
先週からの篠の行動を見てれば、何となくだけわかる。  
入学式の日、教室と寮で・・・篠、ちゃんと楓のことをやつてたもんな。

束さんのことを聞いて来る生徒から、さ。

「・・・やれやれ」

さつきのセシリ亞じゃないけど、肩を竦める。  
素直じや無いんだからな、篠は。  
あ、昔からか。

「せつせと席につけ、大馬鹿者が  
「・・・つてえつー?」

チャイムが鳴ったのに気が付かなかつたから、教室に来た千冬姉に  
頭をはたかれた。

・・・と、言うわけで。

俺は、1年1組のクラス代表になつた。

### 第3話：「クラス代表決定戦・後編」（後書き）

篠ノ之 楓：

どうもです、「白式」に触れてひやつほうな楓です。

アレは今やどこの企業にも国にも所属していないので、私も触れて嬉しいです。

ま、詳しい所属はまだどつかに決まるでしょ。

それでは今回はIS整備に関する物で、「初期化」と「最適化」、それでもって「一次移行」について説明しちゃいますね。

「初期化」・・・

読んで字の如く、ISのコアを初期化する作業。全世界に配備されているISの内100～150くらいは研究開発用で、新しいIS（コア外装）の開発に日夜研究されてるわけですが・・・そこで新しい外装にしたり、あるいは操縦者を変更したりする場合は前の外装・操縦者の記憶をコアから「初期化」しないといけないんです。今回の場合、「白式」に一夏さんを操縦者と認めさせるための第一段階としてその作業が必要だったわけです。

「最適化」・・・

これも読んで字の如く、そのIS（特にコア）を新たな操縦者に適合させる作業。これが終わると「一次移行」と言う現象が起こってその操縦者の「専用機」になることができます。量産機・訓練機なんかは「最適化」せずに使うんで、これは特に専用機持ちの人には施される作業ですね。自動でもできますが、時間が・・・今回の場合、一夏さんが試合中に適合させた感じですね。

篠ノ之 楓：

ふう・・・では次回、セカンドが来るそうです・・・セカンド?  
・・・束お姉ちゃん、勝手にドロップ缶持つて行かないでね?

篠ノ之 束：

ぎくうつ!?

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0293z/>

---

インフィニット・ストラatos 黒き叡智

2011年12月16日19時20分発行